その者の拳は滅殺の拳

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
その者の拳は滅殺の拳

【Ｎコード】
Ｎ５６９５Ｙ

【作者名】
ハジケ

【あらすじ】
リリカルなのはの世界に降り立った一人の格闘家・・彼はこの世界にどのような変化をもたらすのか・・・

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（前書き）

この作品は思いつきで書いたんですけどよろしくお願いします。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家

俺は今少しだけ困っていた・・・

「参ったな何故かは分からないが俺の中の殺意の波動が揺らいでいる・・・。」

これでは次元転移ができない・・この世界の環境では修業の質が高まりそうにないから早く何処か別の世界に行きたかったのだが・・・・。

「この世界・・実は何か特殊な物でもあるのか？」

でなければ俺の殺意の波動は揺らぎはしない・・・。

「少し探るか・・ん？。」

俺は足の下に違和感を感じたどうやら何か踏んだようだな・・・。

「何だこれは・・？」

俺が踏んでいたのは石だったしかしこの石ただの石ではないな・・・。

フェイト　Ｓｉａｄ

私とアルフがジュエルシードを探していると一人の男の人がいた・・・あれは！？ジュエルシード・・まさかあの人ジュエルシードを狙ってるの？

「おいそこのアンタその手に持ってる者を渡しな！」

私が思想に浸ってる間にアルフが男の人にジュエルシードを渡すように言っていた素直に渡してくれればいいけど・・・。

「嫌だと言ったら？」

「力ずくで奪うよ！」

「ちょっ、アルフ！」

「大丈夫だよフェイトあいつ魔力を感じないしちゃんと加減してすぐ終わらせるさ！」

「それならいいけど・・・。」

男の人Ｓｉａｄ

すぐに終わらせるか・・相手の実力も分からんようではこの世界の奴らの実力もたかが知れているな。

「すぐに終わるといいがな。」

「心配しなくてもすぐに終わるさ！」

あのアルフとか言う奴が攻撃を仕掛けて来た・・この世界ではあのスピードを早いと言うのだろうが・・・。

「遅すぎる。」

シャッ、ビッ。

「あ・・あれ？あの男は・・・。」

「後ろだ・・・。」

「なっ、いつの間に！？」

「貴様では俺に勝てん・・・。」

「何でそう断言できるのさ！」

「貴様は俺に魔力が無いと言う理由で勝てると思ったみたいだが・・・。」

「普通そう思うだろ！」

「普通か・・戦いにおいては多くの要素が入り交じる・・魔力が無いそれだけで相手を甘く見るのはどうかと思うぞ。」

「うっ・・それは・・・。」

「それとそこの金髪の少女・・フェイトと言ったな何故、攻撃をして来ない今の俺はお喋りをして隙だらけだと思わなかったのか？」

「え・・そっ、それは・・・。」

「考えられなかったのか？俺の話しを聞くのに少し集中してしまって？」

「はっ、はいそうです・・。」

「ふむ・・そうか相手の話しに耳を傾ける事は別に悪い事ではないがな。」

素直な子と言う所か・・。

「アンタ何者だい・・・？」

「俺は・・」

「よっしゃー！こっからはじまるぜー！」

「なっ、何だい！？」

「むっ・・（大きめの気が現れた・・。）」

転生者　Ｓｉａｄ

いたよいたぜフェイトちゃんがそれにアルフも！・・・なんかしらねー男もいるが無視だ。

「ねー彼女達ちょっといい！」

「何だいアンタ？」

「ジュエルシード集め手伝ってあげるよー。」

「何でジュエルシードの事を！？」

「ジュエルシード・・？（もしかしてこれか・・。）」

「大丈夫、俺さあ君たちの味方だから・・・あ、それと俺の目さあ二人ともちょっと見てくんない。」

魅惑の魔眼発動！これで二人は俺の・・

グサ。

「イッテエ！目が目がぁぁああー！！」

「ちょっ、アンタ何いきなり目潰ししてんの！？」

「こいつが変な術を発動しようとしたからだ。」

「変な術！？」

「あれは恐らくチャームの類だな。」

「チャームだって！？」

「目イテエ・・・くそテッメエよくもやりやがったな！それにばらしやがって！こうなりゃ力ずくだ！」

男の人　Ｓｉａｄ

力ずくか・・確かにこの世界のレベルでは尋常ではない気の量だがな・・。

「戦うのか？」

「何だびびってんの！だろうな、なんたって俺は巨大な魔力と魔法以外にも超サイヤ人並みの気を持ったハイブリッド転生者びびってもしゃーねぇよギャハハッ・・」

ドゴン！

「隙だらけだ・・。」

「いっ、いつのまに・・しゃべってる最中にきっ、きたねえぞ・・。」

「戦いの最中に喋る奴が悪い。」

「あ・・ぐっ。」

どうやら気絶した様だなそれにしても転生者とは・・。

「あっ、あの助けてくれてありがとう。」

「別に礼を言われる様なことはしていない。」

「いや・・あの変なのの魔力は実際巨大だったアタシたちじゃ勝てなかったと思う。」

「確かにな。」

「何かアイツ、アタシ達狙ってたみたいだしそれを倒したアンタには礼を言うよ。」

「そうか・・。」

「あっ、あのジュエルシード・・。」

「んっ？これか・・こんなの別に要らんしな・・やる。」

「あっ、ありがとう・・。」

「さて行くか・・。」

「どこにいくんだい？」

「さあ・・？」

「さあって・・。」

「あっ、あのよかったら家に泊まっていきませんか？」

「いいのか？」

「はい、助けてもらった恩もありますし。」

「そうかありがとう助かったよ、この世界にはまだ不慣れでね。」

「この世界？アンタ別の次元の人間かい。」

「ああ、そうだ。」

「あの一つ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「名前なんですか？」

「そうかさっきは言えなかったな・・俺の名前は、キルアだ。」

「キルア・・キルアさんですね。」

「フェイト～早く家帰ろうお腹減ったよー。」

「うんそうだねアルフ帰ろうか・・キルアさんもほら一緒に。」

「ああ分かった。」

しかしあのジュエルシード言う石ただの石では無いようなんだが何故あんな少女が集めているんだ・・それに転生者とは・・・まあ今考えても仕方ないな・・・。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（後書き）

フェイト「小説どうでしたか？できれば次も見てください！」

キルア「よろしく頼む。」

キャラ紹介（前書き）

キルアのキャラ紹介です。

キャラ紹介

キルア

次元を渡り歩く旅の格闘家、旅の目的は己の中の殺意の波動を完全に克服する為である。

能力

殺意の波動（次元転移の為に使用はしているが戦闘では滅多に使わない。）

技

暗殺拳をベースに強化した技を使う。

性格

人に厳しく自分に厳しい性格、戦いにおいては非常に冷静。

見た目

黒い胴着に身を包んでいる。

髪は少し跳ねっ毛の黒髪。

目の色は青色。

身長は１７８ｃｍである。

荷物袋を持っている（ストリートファイターのリュウのものと見た目は同じ）

バカな転生者

こいつ今後でるかな・・・。

リリカルなのはの世界でハーレムを目論む・・こいつだけじゃないけど

技

正直どうでもいい。

性格

バカ

能力

キルアにとってはたいしたことなし

見た目

別にこいつの見た目なんか読者様も知りたくないと思う。

転生者「おい俺の紹介いいかげんだぞ！？」

作者「だってただの字数稼ぎだもん。」

転生者「テッメエ！」

作者「キルアさん黙らせてください。」

キルア「分かった。」

ガン！

転生者「ひでぶぅ！」

作者「読者の皆様これからもよろしくおねがいします。」

キャラ紹介（後書き）

作者「本当はキルアの紹介だけでいきたかったんだけどな・・。」

キルア「ネタに影響がでるから出せないものがあった・・だからどうでもいい奴で字数稼ぎ・・と言う所か・・。」

作者「うんそうだね。」

フェイト「キルアの語られない部分・・気になる。」

作者「それは物語でおいおいね・・読者の皆様これからもよろしくお願いします。」

意外にも料理が出来る格闘家（前書き）

作者「今回は少しほのぼの系かな？」

意外にも料理が出来る格闘家

「ふむ・・これは良い所に住んでいるな。」

フェイト達の住んでいる場所は明らかな高級マンションだった・・。

「キルア、ご飯の用意するね。」

「ああ・・頼む。」

「もぐもぐ・・・。」

「ん？」

アルフはすでに何か食べているようだった見てみると・・

「・・・ドックフード？」

「何？キルア？」

「いや・・何でも・・。」

「そう？」

アルフは狼の使い魔だと思うのだがな・・まあ狼でもドックフードを食べることはあるだろうな・・。

「キルアー！ご飯出来たよ！」

「ん？随分早いな・・カップラーメン？」

「え・・嫌いだった？」

「いや、そうでは無い、いつも食べてるのか？」

「うんそうだよ？」

そうなのか・・育ち盛りにカップラーメンを毎日・・これは悪いな・・。

「仕方ない・・俺が作ろう・・。」

「えっ？」

「育ち盛りにこんな物ばかりではいかんからな・・。」

「キルアって・・料理できるの？」

「出来るぞ。」

「意外だねぇキルア、アンタ見た目からして格闘家だろう、ただ焼いて食うしかできないと思ったよ。」

「かってな格闘家のイメージを付けるな。」

確かに調味料が無い場合が多いから大方単純な食べ方になるだろうが・・。

「さて・・冷蔵庫の中は・・・空だな・・。」

「ごっ、ごめんなさい。」

「いや・・別にいい、無ければ採って来ればいい・・。」

「アンタ・・今、買ってくるじゃなくて採って来るって言った？」

「言ったが？まあ狩っても来るが。」

「じゃあ、お金渡すね。」

「ああ米と調味料の分だけでいいぞ。」

「え？それだけ・・？」

「他のは金がかからんからな。」

「なんで？。」

「たぶんキルアの奴、自然にある奴採ってくる気だ・・。」

「それって大変じゃあ・・。」

まずはスーパーで米と調味料だ・・次に野菜だな・・山菜なら山にあるだろう・・次は海で魚でも狩るか・・。

「行って来る・・。」

こうして俺は材料をとりに行った・・すぐに戻るが・・。

「行っちゃったね・・・。」

「そうだね。」

「戻ったぞ。」

「早っ！？」

「別に驚かなくてもいいだろう・・・。」

「いや、驚くよ！てか何その巨大な魚！？」

「マグロだが・・・。」

「マグロって・・何か本当、凄いねアンタ・・・・。」

「早速作るか・・しばらく待っていろフェイト」

「う・・うん。」

「一体どれほどのものが出来るんだろうねぇ・・・。」

「楽しみにして待ってよアルフ。」

「さて・・マグロは切り分けて使わない分は冷蔵庫に入れよう・・マグロは軽く醤油で煮付けるかな・・・。」

山菜は・・味噌汁にでもするか・・では始めるか・・。

「まだかねー。」

「もうすぐだと思うよアルフ。」

「出来たぞ。」

「うわぁ・・凄い。」

「こりゃ美味しそうだ。」

「いただきます！」

「この煮付け美味しいねぇ。」

「アルフ・・さっきドックフード食べてなかったか？」

「こんなの見てたらお腹減っちゃたんだよ。」

「まあ・・多めに作ったし別にいいが・・。」

「このお味噌汁も美味しい。」

「そうか・・それは良かった。」

「誰かの作ったものってあったかいね・・。」

「ん？何か言ったか・・フェイト？」

「ううん・・何でもない。」

「そうか・・では俺も食べよう。」

こうして俺達は三人で食事を楽しんだ・・。

意外にも料理が出来る格闘家（後書き）

フェイト「キルアの料理、美味しかったね。」

アルフ「そうだねフェイト。」

キルア「喜んでくれてなによりだ・・。」

作者「次回もどうか読んでくださいね！」

石集めを協力する事にした格闘家（前書き）

今回プレシア登場です！

石集めを協力する事にした格闘家

フェイト　Ｓａｄｅ

「あの・・キルア、ちょっといいかな？」

「何だ？」

「お願いがあるんだけど・・。」

うう・・キルア、お願い聞いてくれるかな？

「ジュエルシード集め手伝ってくれる・・？」

「あの石集めか・・分かった手伝おう・・。」

「本当！」

「ああ・・本当だ。」

「やったぁ！」

えへへ・・キルア、手伝ってくれるんだ。

「何を喜んでいるんだいフェイト？」

「キルアがジュエルシード集め手伝ってくれるって！」

「本当かい！確かにキルアは凄まじい力を持ってるから協力してく

れると嬉しいね！」

「うん、だよね。」

「・・・でもキルア本当にいいのかい？」

「何だ？」

「アンタ見たところ旅の最中みたいだけど・・何か目的があるんじゃないか？」

「あっ。」

確かにキルアは旅の最中みたいだ・・私のお願いで足をひきとめるのは・・・。

「その事なら気にしなくていい、目的はあるが・・それは急がなくてはいけないことではない。」

「本当！」

「こりゃ頼もしい仲間が出来たね。」

えへへ・・キルアが一緒にジュエルシード集めしてくれる・・嬉しいな。

キルア　Ｓａｄｅ

ジュエルシード・・あの石は明らかにこのような少女・・フェイト

が欲しがる物ではない・・では誰が・・

「キルアに協力してもらう事、母さんに報告しなきゃ。」

「プレシアの所に行くのかい・・？」

むっ・・アルフの表情が暗くなったな・・それに母さんに報告・・プレシアの所・・そういう事か・・・。

「キルア、ちょっと一緒に来てくれる？」

「ああ・・分かった。」

「じゃあ・・行くよ、次元座標８７６Ｃ４４１９・・。」

転移の魔法か・・ジュエルシードを欲しがっているのは・・恐らく・・

「『時の庭園』テスタロッサの主の下へ！」

時の庭園・・・

「少し変わった空間だな・・。」

高次元空間・・と言う所か・・

「キルア、行くよ。」

「ああ・・分かった。」

「母さん・・失礼します。」

「何かしら・・フェイト・・あら、その男は？」

何だ・・あの目は・・娘を見る目じゃないぞ・・いや・・冷たいものとは別のものも感じられるな・・

「あの・・ここにいるキルアにジュエルシードを集めを手伝ってもらう事になりました。」

「こんな魔力を全然感じない男に・・？」

この世界は魔力基準だな・・

「キルアは魔力が無くても凄い強いんだよ！」

「本当にそうかしら・・。」

「なら自分の納得の行く試し方をすればいい・・。」

「そう・・分かったわ。」

杖を向けて来たな・・魔法か・・

「えっ！？母さん、待って！」

「避けられるかしら？」

雷の魔法を奴は放って来た・・普通に避けられるな・・

ビッ、ビッ

「一歩も動いてないのに無傷！？」

「何を言っている・・ちゃんと避けた・・まあ攻撃を受けたとしても無傷だが・・・。」

あれぐらいではな・・

「動いたと言うの・・全く分からなかった・・・。」

「どうこれがキルアの実力だよ！」

「・・・分かったわ、フェイトこの男に協力してもらいなさい。」

「あっ、ありがとうございます。」

「プレシアのあんなに驚いた顔なんて初めて見たね！」

「あっ、アルフ！」

アルフ・・お前も初めは驚いていたよな・・・。

「じゃあ帰ろうか、キルア。」

「そうだな・・・。」

「ちょっと待ちなさい・・キルア、貴方に話しがあるわ。」

「何だ？」

「フェイトとアルフは部屋から出なさい。」

「はっ、はい。」

二人きりで話し・・奴は俺に何の話しがある・・？

「キルア、質問いいかしら？」

「別にいいが・・・。」

「貴方、何者？」

「俺はキルア・・旅の格闘家だ・・・。」

「そう言う事を聞いてるんじゃないわ・・貴方の力についてよ。」

「あれは修業で培った力だが？」

「修業ですって・・！？」

「それにあの位の動き・・俺の知ってる世界の奴は大体できたぞ・・？」

「貴方・・一体どんな世界を生きて来たの・・？」

「そこまで答える義務は無いな。」

「そう・・分かったわ。」

「今度はこちらから質問していいか？」

「何？」

「あの壁の向こうから・・死んだ者の匂いがするのは何でだ・・？」

「・・・！？」

「まあ・・余りにも言いたく無い事なら話さ無くていい・・。」

「そう・・ありがとう・・。」

「あと一ついいか？」

「何？」

「お前、病気だろう・・。」

「・・・！？何で分かるの・・。」

「お前の気の流れが乱れていたからな・・。」

「気？」

「人の中に流れる生命エネルギーだ・・。」

「そうなの・・・。」

「お前にこれをやろう・・・。」

俺は袋から薬を取り出しプレシアに差し出した。

「これは・・・？」

「薬だ・・飲め・・良く効く奴だ。」

「あっ、ありがとう。」

「病気を治したら、フェイトに対する・・自分の中で押し殺している感情に・・素直になるんだな。」

「・・・！？」

「では俺はフェイトの所に行こう・・・。」

プレシア　Ｓａｄｅ

あのキルアという男・・何なのまるですべてを見透かしてるよう・・・。

「フェイトに対する気持ちか・・・。」

確かに私の心の中にはあの子を・・フェイトを・・道具ではなく・・・もう一人の娘として見ようとした気持ちがあるのかもしれない・・

「だって・・」

あの子の私に対する感情が余りにも純粋なのだから・・

「でも・・・。」

今更考えたって無駄よね・・。

「私の体はもう長くない・・。」

そう言えばさっきキルアから薬をもらったわね・・本当に効くのかしら・・私の体の病はそう簡単に治るものじゃ・・・。

「騙されたと思って・・飲んでみるかしら。」

ゴクン・・・あれ・・これは・・

「か、体が軽くなった・・。」

まっ、まさか治ったって言うの！？

「こんな薬を持ってるなんて・・キルア・・貴方、本当に何者なの・・？」

キルア　Ｓａｄｅ

「むっ・・・。」

「どうしたのキルア？」

「いや・・何でもない・・。」

「そう？じゃあ家に帰ろう。」

「そうだな・・。」

プレシアの気の流れが正常になった・・ちゃんと薬を飲んだようだな・・

「明日からはキルアも一緒にジュエルシード集めだね、がんばろう！」

「ああ・・そうだな。」

明日からジュエルシード集めか・・フェイトの身をちゃんと守らねばな・・そんな事を考えながら俺はフェイト達とともに帰路についた・・。

石集めを協力する事にした格闘家（後書き）

キルア「次からはジュエルシード集めか・・・。」

作者「一応そうですね。」

フェイト「キルアがいるからとっても安心だよ！」

作者「確かにキルアさんチートですからどんなことあっても対応してくれますからね。」

キルア「世の中には俺より強い奴もいる・・・。」

フェイト「謙虚なんだね、キルアは！」

作者「あのお二人さんよろしくお願いします。」

フェイト「はい！」

キルア「では次回も・・・」

フェイト「どうかこの小説を見てください！」

欲深き者には破滅のみ。（前書き）

重要なオリキャラ登場！

欲深き者には破滅のみ。

「はあぁ・・。」

今キルアは気を高め練り上げていた。己の体が鈍らぬように・・これをかれこれ朝の三時から四時間は続けている。

「ふぅ・・・これぐらいで良いか・・さて・・戻るとしよう。」

アルフ　Ｓｉｄｅ

「ふぁー・・・ん？」

キルアがいないねぇ・・。

「どこいったんだい・・トイレかな？」

「トイレじゃ無いぞ。」

「わっ！？」

いつからそこに！？

「急に現れないでおくれよ、心臓に悪いじゃないか！」

「次からは気をつけよう・・。」

「まったく・・・。」

「さて・・朝飯でも作ろうか・・・。」

「ふぁ・・おはよう、アルフ、キルア。」

「おはよう・・フェイト、今から朝飯を作るから待っていてくれ・・・。」

「うん、分かった。」

「食べたらジュエルシード探しだね。」

「そうだな・・・。」

このあと私とフェイトはキルアの作った朝ごはんを食べた。やっぱり美味しかったね。

キルア　Ｓｉｄｅ

「さて・・行くか。」

「そういやキルアって飛べるのかい？まあアンタなら走ってもついてこれそうだけど・・・。」

「飛べるぞ・・・。」

「魔力もないのにどうやって飛んでるの？」

「それは気の力だな・・。」

「気？」

「簡単に言えば生命エネルギーだ・・。」

「ふーん・・アンタの強さの秘密はそれかい？」

「まあ・・そうかな・・。」

まあ・・別の力も俺は持っているが・・それは戦いでは滅多に使わないしな・・

「気かぁ・・私も使えるかな？」

「修業をすればな・・。」

まあ・・フェイトは魔力の資質が高いから気よりも魔力を高めた方がいいだろうが・・。

「さて・・話はこれぐらいにしてジュエルシード集めを開始しよう・・。」

「うんそうだね。」

俺達はジュエルシードがあるのかまだ探索されてない場所に向かった。

「この辺りはまだ探してないんだよね。」

「では探すとしよう・・・。」

「あっ、キルア、ジュエルシードに衝撃とか与えちゃダメだからね。」

「分かった・・・。」

大方・・暴走でもするのだろうな・・・。

「さて・・あの石の力を探ってみるか・・・。」

ふむ・・・感じないな・・・。

「力が発動してる状態ならすぐに見つかるのだろうがな・・」

神経をもっと研ぎ澄ますか・・・。

フェイト　Ｓｉｄｅ

「んー反応ないなー。」

ジュエルシードが発動していないのか、それともただ無いだけなのか・・

「もっと頑張って探さないと・・・。」

お母さんの為にも・・・。

「フェイトちゃんみーつけた・・・プヒヒ。」

「えっ、何!?」

「ジュエルシード探してるんでしょ・・ぼくちん持ってるよ、しかも原作じゃ見つからなかったのをね・・・プヒヒ。」

「・・原作?」

「ジュエルシード欲しいんでしょ、ぼくちんのお嫁になるならあげるよ・・・プヒヒ。」

「な、何言ってるのこの人・・・。」

何か・・怖い。

「まあ、嫌って言ってもお嫁にするけどね・・・プヒヒ。」

「ひっ、さ・・サンダースマッシャー!」

バチィ!

「やっ、やった・・?」

「だめじゃないか~未来の旦那様に攻撃しかけちゃ~それにぼくちんはSSSランクの魔力を持ってるんだからこんなのきかないよ~」

「あ・・ああ・・・。」

「ちょっとおしおきしなきゃいけないかな～。」

「ひっ・・・。」

怖い・・助けて・・キルア！

「おい・・フェイトに何をしようとしている・・。」

「プヒヒ！？」

「キルア！」

キルア　Ｓｉｄｅ

ジュエルシードの力を感じて、その場所にフェイトと知らない奴の気を感じ、何かと思い・・来てみたらこんな事になってるとはな・・

「プヒヒ・・・なんだお前は？」

「それはこっちの台詞だ・・貴様は何者だ・・。」

「ぼくちんは転生者さ。」

転生者・・会うのは二人目だな・・。

「そうか・・転生者か・・。」

「プヒヒそれよりもお前は誰かって聞いてんだよ、ぼくちんをおこらせると怖いよ～。」

「別に貴様が怒っても怖くはないが・・まあ・・答てやる、俺はキルアだ・・。」

「キルアだって？そんな奴原作にいたかな？」

「キルア、助けに来てくれたんだね、ありがとう！」

「ああ・・無事のようだな・・フェイト。」

「プヒヒー！お前何フェイトちゃんと仲良くしてんだぶっ殺すぞ！」

「殺れるものならな・・。」

「なめやがってー！くらえー！ＳＳＳランクま・・」

ドガッ。

「プヒャフ！？いたいよーお前なにしやがった！」

「普通に殴っただけだが？」

「うそつけーお前がなぐるとこなんか全然みえなかったぞ！」

「貴様に目視できない速さなだけだろう・・。」

「くっそーお前も転生者だったんだなードラゴンボール基準の力もらいやがってーずるいぞ！！」

「俺は転生者じゃない・・。」

「うそつくなー！転生者でもない奴がこんな力、もってるわけないだろ！」

「それより・・貴様、ジュエルシードを持っているな・・大人しく渡せ・・。」

「嫌にきまってんだろうがー！くそこうなったらジュエルシードの力を使う！」

「えっ！？」

「プヒヒ・・・プヒッ、力がみなぎる～。」

「確かに魔力が上がったみたいだな・・。」

「くたばれー！！」

「キルアー！」

「・・。」

シャッ、ドゴォ！

「ブビィ！？」

「ジュエルシードは貰うぞ・・。」

「簡単に倒しちゃった・・やっぱりキルアは凄い！」

「さて・・ジュエルシードも一つ手に入った事だし・・フェイト、アルフを呼んで帰るぞ・・。」

「うん、そうだね。」

俺とフェイトはアルフを呼びに向かった・・・。

キルア　ＳｉｄｅＯＵＴ

「ぐぞー壊れチート転生者め・・・・。」

「彼は転生者では無い・・・・。」

「！？誰だ・・・お前。」

「私はある御方の使者だ。」

「神の・・・か？」

「・・・力が欲しくはないか？」

「な・・に・・・・？」

「素晴らしい力をあげようと言っているんだ、君の知っているドラゴンボールとかいう漫画のキャラとやらの力を遥かに越える力を・・・。」

「ほんとか！？」

「本当だとも。」

「どのキャラより強い力だ！？」

「計測では超一星龍とかより遥かに強いな。」

「何！？くれ・・・いますぐ、くれ！」

「焦らなくとも、すぐに渡そう・・・受けとれ！」

ある御方の使者は転生者の胸に光る玉を押し込んだ。

「プヒッ？プヒィー！！」

「力は与えてやったぞ。」

「ミナギ・・ル、チカラガミナギルゾ。」

「・・・（精神が壊れかけているなこいつの精神力はこんなものか・・・。）」

キルア　Ｓｉｄｅ

「むっ・・・。」

何だ・・この巨大な気は・・。

「キルア、やっぱアンタ凄いねぇ、ＳＳＳランクの魔力のうえにジュエルシードの力使う奴あっさりやっちゃうなんてね・・・どうしたんだい？」

「巨大な気がこちらに向かってくる・・。」

「何だって！？」

「キルア・・・コロス」

「な、何だいコイツ。」

「この人・・さっきの転生者とかいう人に少し似てる・・。」

「しかし・・気の性質は全くの別ものだがな・・。」

「ウガガ・・・シネッ！キルア！」

ブオン！

「スピードもさっきとは全く別ものだな・・だが・・捉えきれる。」

ガッ。

「ウケトメタ、ダト！？」

「この位では俺を倒せん・・。」

だが・・どうやって、この短い時間の間にこんな力を身に付けたん

だ・・？

「ヴ・・ベボラ・・ガギグャヂャベ・・・。」

「！・・・フェイト！アルフ！目を閉じろ！」

「えっ、何で？」

「何で閉じなきゃいけないいんだい？」

「いいから早くしろ！」

この技は・・見られたくないからな・・。

「わ、分かった・・。」

「閉じるよ・・。」

「それでいい・・。」

「ヴグオァェ！」

「久々に使うな・・この技を・・」

今は殺意の波動なしで使えるとはいえ・・使えば殺意の波動に響くからな・・。

「くらえ・・・瞬獄殺。」

ドガガガガガガガガガガガガガッ！キィン！！

「ガ・・・・ガ・・・ガ・。」

ボシュッ！

「もう開けていい？」

「ああ・・。」

「ありゃ？さっきの奴は？」

「消滅させた・・。」

「え・・・殺したの。」

「奴は精神が崩壊して力を暴走させ爆発しそうだったからな・・人殺しと言うならそう呼んでも構わん・・事実そうだからな・・。」

「ううん・・言わないよ・・だって仕方なかったんでしょう・・私たちを守るために・・。」

「そうだよ、キルア、アンタが気にすることはないよ！」

「そうか・・」

だが・・俺が人殺しなのは間違いない・・なぜなら・・

「それよりもキルア、早く帰ろう！」

「そうだよ、帰ってゆっくり休もうじゃないか。」

「そうだな・・・。」

それにしても・・奴はどうやってあんな力を手に入れたんだ・・・。

キルア　ＳｉｄｅＯＵＴ

「ふむ、やはりこうなったか・・・それにしてもあの男の力は・・・・
あの御方に報告しておくか・・・・。」

この謎の使者は何者なのか・・・そしてあの御方とは・・・？

欲深き者には破滅のみ。（後書き）

作者「いやーみごとにオリ展開フラグたったな。」

キルア「大丈夫なのか・・？」

作者「頑張ります・・・。」

フェイト「それにしても私キルアに全然ついていけてないな・・・。」

作者「一応、フェイトもパワーアップさせようかとは思うんだけど・・」

フェイト「本当！」

作者「でもキルアには結局は全然及ばないと思うけど。」

フェイト「だよね・・。」

キルア「人には可能性というものがある・・フェイトが俺より強くなる可能性もあるだろう・・すぐには無理だが。」

フェイト「そう言ってくれると嬉しい・・ありがとうキルア！」

キルア「・・普通の事を言っただけだが・・・。」

作者「では読者の皆様どうか次回もこの作品を見てください。」

フェイト「次回もどうかよろしくお願いします！」

キルア「次回もよろしく頼む・・・。」

転生者再び！（前書き）

バカな転生者再び！

転生者再び！

キルア　Ｓｉｄｅ

「・・フェイトちょっと昨日、転生者から手に入れたジュエルシードを見せてくれ・・」

「うんいいよ？」

「・・・。」

「どうしたの？」

「いや・・何でもない・・。」

「そう？・・そう言えばこのジュエルシード原作では見つかってないジュエルシードとか言ってたな昨日の転生者って人。」

原作？それにしても・・昨日の違和感は確かな物だったか・・このジュエルシード最初に見た物とは、何か違う・・ほとんど同じなのだが・・。

「では、ジュエルシードは返すぞ。」

「うん。」

「さあ今日も、はりきってジュエルシード探そうかね。」

「そうだね、アルフ。」

「いや・・今回は俺だけで探しに行こう・・。」

「えっ、何で？キルア。」

「フェイトにアルフ、お前らは俺と会う前から休まずにジュエルシードを探してるんだろう・・たまにはゆっくり休め・・。」

「えっ、でも・・・。」

「分かったよ・・キルア、アタシとフェイトは今日は休むよ。」

「アルフ！？」

「フェイト確かにキルアの言う通りだフェイト特にアンタは無茶してるじゃないか。」

「で・・でも・・・。」

「フェイト、休息も時には重要だ。」

「わっ、分かったよう・・キルアと一緒に探したかったのに・・・キルアのバカ・・・。」

「何か言ったか？」

「なっ、何でもない！」

「そうか・・朝飯と昼飯は冷蔵庫に作り置きしてあるのがあるからそれを食べてくれ・・夕方までには帰る・・では行って来る。」

「気をつけてね、キルア！」

「ああ・・分かった。」

俺はフェイトがまだ探してないと言っていた場所に向かった。

「ふむ・・では神経を研ぎ澄まして・・・。」

「見つけたぜえ！」

「お前は・・最初に会った転生者。」

「覚えていたか！」

「まあ・・一応・・・。」

「ムッカッツクなテッメエ・・・・。」

「ジュエルシード探しで忙しいんだ・・相手にしてる暇は無い。」

「ここにゃジュエルシードはねえよ！原作にこんな場面はなかったからなあ！」

「原作？」

フェイトが言うには昨日の転生者も原作がどうとか言っていたらしいな・・情報を引き出すか・・・。

「おい、原作ってなんだ・・？」

「それゃこの世界のアニメだろ！」

「アニメね・・。」

もしや・・この世界は知り合いの科学者が言っていた漫画とやらによく似た世界・・そんな所か・・？

「おい・・原作で見つかってないジュエルシードってのはあるのか？」

「はあ？何言ってんの？全部見つかってんだろお前、にわか転生者なの？」

「俺は転生者じゃない・・。」

原作ではジュエルシードは全部見つかっている・・か・・では昨日の原作にはないジュエルシードと言うのは一体・・・？

「転生者じゃないって・・じゃあお前のその力なんだよ！？」

まあこの世界はあくまでもよく似た世界・・原作とやらと違う所もあって当然だな・・

「テッメエ・・何者だ！？」

「ただの・・旅の格闘家だ。」

「そんな答えで納得できると思ってんのか！パワーアップした俺の力でぶっ・・。」

トンッ

「情報提供・・礼を言う・・無駄に戦うのは好まないんでな・・気絶してもらう。」

「あ・・あが。」

「さて・・・」

色々気になる事はあるが・・ジュエルシード探し・・再開だ。

「ふむ・・この辺りには無いようだな・・。」

あれだけ探したのだから間違いないな・・。

「そろそろ、夕方だ・・帰るか。」

今回の収穫は無しか・・

フェイト　Ｓｉｄｅ

「キルア・・そろそろ帰ってくるかな？」

ガチャ

「今戻ったぞ・・・。」

「あっ、お帰りキルア！」

「んで？ジュエルシードは？」

「すまないな・・見つからなかった・・・。」

「きっ、気にしなくていいよ！明日、私と一緒に見つければいいんだから！」

「ねぇ・・・フェイト、私とって事はアタシ抜きかい？」

「あっ、アルフそういう事じゃないよ！」

ごめん・・ちょっと忘れてた。

「そう・・ならいいんだい。」

「今日はジュエルシードを見つけられなかった詫びに特別な料理を作ろう・・。」

「特別な料理？」

何だろう・・・気になるな。

「ウャパマチョスだ。」

「ウャパマチョス！？」

全然聞いたことないよそれ！？

「それ・・美味しいのかい？」

「ああ・・美味い。」

キルアがあんなに笑みをこぼすなんて・・どれだけ美味しいんだろう？

「では・・作るのに取り掛かろう。」

「楽しみにしてるよ、キルア。」

料理中～～～料理終了。

「出来たぞ。」

「凄いこんなの見たことない！」

「いいにおいだねぇ～いただきます！」

ガブッ・・もぐもぐ

「どうだ？アルフ。」

「これは！？説明できないけど美味い！すっごく美味い！！」

「じゃあ、私も。」

パク・・もぐもぐ。

「美味しい・・これすっごく美味しいよ！」

「そうか・・喜んでくれて何よりだ。」

「これ、材料何なの？」

「チムウマムとウラパラルにカリマミナグだ。」

「聞いた事ない食材だね？」

「まあ・・貴重だからな。」

「これ・・母さんにも食べさせてあげたいな・・。」

「そうか・・では届けて来よう。」

ブン・・・

「えっ・・？」

キルアが・・・急に消えた！？

プレシア　Ｓｉｄｅ

「・・・・。」

「どうした、そんなに驚いた顔をして？」

「普通、目の前に人がいきなり表れたら驚かないかしら？」

「ふむ・・それもそうか・・。」

「と・・言うよりどうやってこの場所に来たの？フェイトは一緒じゃないみたいだし。」

「俺の力を使って来た・・このぐらいの移動なら大丈夫なんでな・・。」

「本当・・貴方すごいわね・・ああ、それと礼を言わなきゃ・・病気、調べた所完全に治っていたわ・・ありがとう。」

「別に礼を言われる事はしていない・・。」

「所で何しに来たの？」

「これを渡しに来た。」

「これは・・？」

何これ・・いい匂いはするけど・・。

「ウャパマチョスと言う料理だ。」

「ウャパマチョス？聞いた事ないわね・・で、何でこれを私に渡しに来たの？」

「フェイトがこれをお前に食べさせてあげたいと言ったからだ。」

「！？そう・・・。」

「じゃあ・・俺はフェイト達の元に帰るぞ・・・。」

「待って！」

「何だ？」

「フェイトに今度一緒に・・・ご飯食べましょうって伝えて・・・。」

「・・・分かった。」

ブン・・

「・・・言っちゃったわね私・・・以前なら絶対あんな言葉考えられないわ・・・。」

私の心が病がなくなった事で変わってるのかしら・・・。

「とりあえず頂こうかしらウャパマチョス。」

パク・・もぐもぐ。

「美味しい・・・！？」

それに何かお肌のツヤが良くなってる！？

「これは素晴らしいわ・・・・。」

キルア　Ｓｉｄｅ

「戻ったぞ・・。」

「どこに行ってたのキルア？」

「プレシアの所だ。」

「母さんの所に！？」

「フェイトが母さんにこの料理食べさせいと言ったからな届けて来た。」

「そうなんだ・・・ありがとうキルア！」

「礼を言われるほどの事ではない・・それよりも、フェイト・・近々良い事があると思うぞ・・。」

「えっ、何？」

「さて・・・何だろうな？」

全て伝えるよりも・・こちらの方が分かった時に嬉しいだろう・・。

「さて・・俺もウャパマチョスを食べるか・・。」

「あーゴメン、キルア。」

「何だ・・アルフ？」

「アンタの分まで食べちゃった・・・ウャパマチョス。」

「何・・・！？」

「ごめん・・キルア私は止めたんだけど・・。」

「いや・・・いい・・俺は別の物を作って食べよう・・・。」

ウャパマチョス・・楽しみだったんだがな・・。

転生者再び！（後書き）

フェイト「ウャパマチョス美味しかったね。」

アルフ「本当あの味は忘れられないよ！」

キルア「あの料理が喜んでもらえて何よりだ・・。」

フェイト「それにしてもキルアは大人だよね、自分の好きな食べ物取られても怒らないもん。」

キルア「そうか・・？」

アルフ「アタシだったら怒るね。」

フェイト「アルフ・・自分の怒る事、人にしちゃ駄目だと思うよ・・・。」

アルフ「う〝っ、そうだね・・。」

キルア「怒るって、どのくらいだ？」

アルフ「何とってんだい！！ぐらいかな。」

キルア「何だ、軽い方だな・・俺の知ってる奴は食べ物取ったらクレーター何個も作るぐらい暴れるぞ・・。」

アルフ「それ・・異常だと思うよ・・・。」

作者「読者の皆様これからもこの小説をどうかよろしくお願いします！」

フェイト「次回も見てね！」

アルフ「よろしく頼むよ！」

キルア「どうか・・この小説を見てくれ・・。」

白き魔法少女との出会い（前書き）

リリカルなのはの主人公高町なのは登場！

白き魔法少女との出会い

「キルア！ジュエルシードの反応があったよ！」

「ん？何処だ？」

「ちょっと遠いけど海鳴って所。」

「では・・すぐに向かうか・・。」

「アタシは別のジュエルシードを捜索するよ。」

「転生者とか言う奴等がいるからな・・気をつけろよ・・。」

「分かってるって。」

キルアとフェイトは海鳴のジュエルシードの反応がある場所に向かった。

「ん？何だ・・あの辺り、空間が灰色になっているぞ・・。」

「あれは・・・広域結界！？」

「見た所、辺りの空間との時間軸をずらす結界術か・・。」

「でもこれが発動してるという事は・・・私以外の魔導師がいる。」

「そうか・・では、ジュエルシードの元に向かうぞ、フェイト。」

「うん。」

キルアとフェイトはジュエルシードの元へと向かう。そしてその場所には巨大な猫と白い魔法少女とフェレットがいた。

「でかい猫だな・・。」

ジュエルシードの気配を感じるな・・あの猫。

「何だろうあの人たち？」

「あれは・・！？」

片方の格闘家風の男はともかく、もう一人の少女は僕と同じ世界から来た魔導師！？まずい！今のなのはじゃ勝てない！

「フェイト、さっさとジュエルシードを回収しよう。」

「うん、そうだね！」

「ちょっと、何を言ってるのあなたたち！ジュエルシードはユーノ君のなんだよ！」

「証拠は？」

「えっ、証拠はユーノ君がそう言ったから・・・。」

「そう言ったからか・・果たしてそれは本当の事なのか？」

「えっ？」

「巨大な力を持つジュエルシードを自分の手に置くための嘘だったら？」

「なのは、僕は嘘なんか言ってない！」

「・・・私は・・私はユーノ君を信じる！」

「なのは！」

「信じるか・・迷いのない、いい目をしてるな・・だが・・周りをよく観察する目はまだまだだな。」

「えっ？」

「キルアー！ジュエルシード封印完了したよ！」

「えっ！？」

キルアがなのはとユーノと会話している間にフェイトがジュエルシードを封印していた。

「喋ってる間に・・・卑怯だぞ！」

「喋って、隙だらけなのが悪いんだよ？」

「なに！？」

「貴様は格闘技の試合中に余所見をした選手がやられて、相手の選手に卑怯だと言ったらどう思う？」

「え、それは余所見した方が悪いんじゃ・・・。」

「そうだ・・余所見した方が悪い・・だからフェイトの行為を卑怯だと言うのは間違いだ。」

「ぐっ。」

「キルア、あの子・・ジュエルシードいくつか持ってるね。」

「ああ・・だな。」

「茶髪の少女・・なのはとか言ったな大人しくジュエルシードを渡せ・・無駄な争いは好まん。」

「嫌です！これはユーノ君のなんです！」

「君たちはジュエルシードを集めて何をしようとしているんだ！？」

「・・・知らん。」

「知らんって・・・。」

「何をするかは本当に知らん。」
「母さんの研究に必要って事は聞いてるけど・・私も何をするかは知らないや・・。」
「ジュエルシードの危険性が分かっているのか！？」
「いや・・正直、手に終えん物では無いと思うな。」
「魔力も無い人間が何を言っているんだ！」
「魔力が無くてもキルアには気があるんだよ！」
「気？」
「生き物に流れる生命エネルギーだよ！」
「生命エネルギーって・・それは一体どれほどのものなんだ・・？」
「別に貴様に見せる必要はない。」
「なっ。」
「それよりもそこのあなた・・ジュエルシードを渡して。」
「嫌です！」
「じゃあ力づくでも。」
フェイトはバルディッシュを構えた。

「！・・・戦うしかないんだね。」
なのはもレイジングハートを構える。
「フェイト。」
「キルアは手出ししないで・・ここは私だけでやるから。」
「そうか・・分かった。」
今二人の魔法少女が激突しようと・・
「お、いたいたフェイトちゅわん！」
「えっ、何！？」
「お呼びじゃない、なのはもいるぜー。」
「あなたもしかして・・転生者！？」
「え、何で分かったの？もしかしてあったことすでにあんの？」
「・・・まあね。」
「てか、そこの格闘家風の男も転生者？」
「これで言うのは何度目だろうか・・俺は転生者じゃない・・。」

「ふーん、まあいいや・・・とりあえず、なのは死んどきな！この白い魔王め！」

転生者3はなのはに向かってＳＳＳランクの魔法を放とうとした・・・だが

ガッ

「へ・・いつの間に？」

キルアが転生者3の腕を掴んでいた。

「おい・・貴様、いきなりこのような少女に向かって白い魔王と言う発言と殺そうとするのはいけないんじゃないか？」

「か、彼いつの間にあの転生者と言う奴の腕を掴んでいたんだ！？」

「あの人、私を助けてくれたの？。」

「うぎ、放せ！」

「分かった・・。」

パッ

「たく、いてえじゃんよ・・・さて、なのは殺そ。」

「何を勘違いしてるんだ？」

「へ？」

「俺は腕を放しただけで貴様を倒さんとは言っていないぞ・・？」

「なんだと！？」

「心配するな・・死なんぐらいの力加減でやってやる・・・。」

「んだと！」

「羅刹旋風脚！」

ギュオオ！

「ぐばあ！？」

「黒龍拳！」

ドガッ、ガッガッガッガッガッ！

「あべし！？」

「業・波動拳！」

ドンッ！

「うばあ！」

「ふぅ・・久しぶりにこれらの技を使ったな、たまには使わんとな・・。」

「何が起こったんだ・・・？」

「技を使ってこいつを倒しただけだ。」

「技を使ってたのか！？」

「フェイト、余計なちゃちゃが入った事だし今日はもう帰ろう・・ジュエルシードを集めていればまたいずれこいつらとは会うだろう。」

「うん、そうだね。」

キルアとフェイトは帰ろうとするが・・

「待って！」

なのはが呼び止めた。

「何？」

「私、高町なのは！あなたの名前は。」

「・・・」

「フェイト、名を語られたら返すのが礼儀だ。」

「うん・・私はフェイト・テスタロッサ。」

「フェイトちゃんだね・・・あのそちらの私を助けてくれた人は・・

？」

「キルアだ。」

「キルア・・さんですね。」

なのはは顔を赤らめながらキルアの名を呟いた。

「？・・・行くか、フェイト。」

「・・・。」

「どうした？フェイト。」

「なっ、何でもないよ！」

あの子もしかしてキルアの事・・・。

「む・・この転生者はこんな所に置いておけんから山奥に捨ててくる。」

「えっ？」

「こんな奴をこんな所に放置していいと思うか？フェイト。」

「思わない。」

「だろう・・。」

そう言うとキルアは転生者を抱えて消えた。

「あっ、消えた！？」

「すぐ戻ってくるよ。」

「戻って来たぞ。」

「早っ。」

「まだ遅いほうだ・・・。」

「あれで遅いのか！？」

ユーノは凄く驚いた。

「じゃ、キルア帰ろう。」

「そうだな。」

キルアとフェイトは家に戻るのだった。

「・・・。」

「なのは？」

「あの人かっこよかったな・・・。」

「え？今なんて？なのは。」

「なっ、何でもないよ！」

一人の少女は恋に芽生えたようだった・・・。

白き魔法少女との出会い（後書き）

フェイト「・・・・。」

キルア「フェイトはどうしたんだ？」

作者「乙女には色々あるんですよキルアさん。」

キルア「そうか？」

フェイト「（恋のライバルが増えちゃったよ・・・・。）」

作者「（そもそもキルアさん恋愛事、興味無しだけどね・・・・。）」

アルフ「私、出番少なかった・・・。」

作者「すいません次回ちゃんとけっこう出ますよ。」

アルフ「そう？」

作者「では読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしくお願いします。」

フェイト「次回もどうか見てください！」

アルフ「次回もよろしく頼むよ！」

キルア「こんな小説だが次回もどうか見てくれ。」

溢れる思い・・・嬉しい涙（前書き）

プレシアが本当にいい母親って感じです！

溢れる思い・・・嬉しい涙

「プレシアにジュエルシードを今どれぐらい集まったか報告しに行ってみたらどうだ？」

キルアはフェイトにジュエルシード集めの報告を提案した。

「うーん・・・そうだね行こうか。」

「何言ってるんだいキルア！まだ報告しに行く必要なんかないよ！」

アルフは怒り気味に反対した。

「アルフ・・・でも報告は必要だと思うよ？」

「でも・・・。」

「とにかくプレシアの所に行くぞ。」

「何でキルアが妙に行く気があるんだい？」

「・・・。」

プレシアがフェイトと共にご飯を食べようと言っていたからなど今は言えんな・・それではサプライズにならんからな・・・。

「少しプレシアに聞きたい事があるだけだ。」

「ふーん・・・そうかい。」

「じゃあ・・・行くよ。」

フェイトは転移魔法を展開した・・・そしてプレシアの元へ。

「よく来たわね・・フェイト。」

「？・・・・。」

母さん・・・雰囲気が違う・・・？

「それで、何をしに？」

「あっ・・ジュエルシード集めの報告を・・・・。」

「そう・・現在、幾つなの？」

「みっ、三つです・・・・。」

これぐらいじゃやっぱり怒られるかな・・・・。

しかしフェイトの予想とは違う行動が返ってきた。

「そう・・まだまだ全部には程遠いけどよくやったわね、次からも

頑張りなさい。」

「えっ！？」

フェイトは予想とは違う答えに驚いていた・・・その横でアルフも思わず口を開けて驚いていた・・・。

「フェイト、この前ご飯を一緒に食べましょうって伝えていたわよね。」

「え・・・！？」

プレシアの言葉を聞いたフェイトはもの凄く驚いた顔をした。キルアがちゃんと伝えていないから当然である。

「えっ！？何を驚いた顔をしてるのフェイト・・・私はちゃんとキルアに伝えてって・・・。」

「えっ・・・聞いてないよ！？キルア！。」

「ん・・伝えたぞ？近々良いことがあると・・・。」

「え？あれがそうだったの！？」

「キルア、何でちゃんと伝えなかったの！？」

「そちらの方がフェイトの喜びも大きいだろう？サプライズと言う奴だ。」

「・・・意外ね貴方、真面目そうだからサプライズなどと言うものには興味無さそうなのに・・・。」

「・・・仲間から学んだ事だ。」

「仲間？キルアの仲間ってどんな人達？」

「面白い人達だ・・・。」

あの人達は元気だろうか・・・。

「それよりもプレシア、フェイトと一緒に、ご飯を食べるんだろう。」

「そうだったわね・・・アルフ、それにキルア貴方達も一緒にどう？」

「へっ！？アタシもかい！？」

「いいのか？」

「だって貴方達はフェイトの大事な人でしょ？」

「俺は一緒にいた期間が短いが・・・。」

「一緒にいた期間なんて関係ない！キルアは大事な人だよ！」

フェイトは力を込めてそう口にした。

「大事な人か・・そう言われると嬉しいものだな。」

「えっ！？嬉しいって・・」

フェイトは頬を赤く染め、キルアを見た。

「俺もフェイトは大事な人だと思っている・・。」

「え・・・！？」

フェイトは今の言葉で顔を真っ赤に染めた・・・しかし・・・

「そう・・大事な妹の様なものだと思っている。」

「え・・・？」

なんだ・・・妹の様なものか・・・。

フェイトはがっくりと頭を下げた。

「何を落ち込んでいるんだ？フェイト。」

「何でもない！」

「？・・・。」

「・・・クスッ。」

「母さん？」

「いや・・フェイトの反応を見てたら可笑しくて・・・つい笑っち

やった。」

「え・・母さん、笑ったの!?」

「だって貴方がキルアの前で表情を豊かに変えるんだもの・・その貴方の反応が面白くて。」

「もー!母さん!」

「ごめんごめん、フェイト。」

フェイトとプレシアは笑いあっていた仲のよい親子のように・・・。

「あんなプレシア見た事ないよ・・・。」

「フェイト・・幸せそうだな。」

「えっ、本当だ・・フェイトすごくいい顔で笑ってる・・・。」

「あはは、母さんったら。」

「うふふ、ごめんフェイトでも反応が面白かったのよ。」

二人が笑いあってる所にキルアが口を出した。

「さて、そろそろ楽しい会話は食事をしながらにしないか?」

「あっ、それもそうね。」

「ねえ、ご飯を食べながらキルアの旅の話しをしてよ。」

「それは私も知りたいわ、キルア、是非聞かせてほしいわ。」

「別に構わないが・・・。」

「母さん、キルアの旅の話し楽しみだね。」

「うふふ、そうね。」

「俺の旅の話しなどで盛り上がれるのか？」

「アタシも気になるし盛り上がると思うよ。」

「だといいが・・。」

「どうかしら？」

テーブルの上にはプレシアの作った手料理が置かれていた。

「すごく美味しそう。」

フェイトは目を輝かせながらそう言った。

「いただきます！」

フェイトはそう言い料理を口にした。

「どう？フェイト。」

「もぐもぐ・・・うっ、うう・・グスッ。」

フェイトは急に泣き出した。

「どうしたのフェイト！？口に合わなかったの！？」

「ううん・・美味しいよ・・・ただ嬉しくて・・とっても嬉しくて、つい涙が出ちゃっただけ・・・。」

「フェイト・・そんなに泣く程、嬉しかったの・・・ありがとう。」

プレシアはフェイトを優しく抱きしめた。

「おかあさん！うう・・うああん！」

「フェイト、ごめんね・・こんな寂しくさせて・・・。」

私が自分の気持ちに蓋をしたがために・・・。
貴方が私のもう一人の娘・・・アリシアの大切な妹と言う事に気づいていたのに気づかないふりをして・・・。

プレゼントは何が欲しいアリシア？

んーとね・・妹が欲しい！

えっ！？

だってそれなら、おかあさんがお仕事が忙しくて家に居なくても寂しくないもん！

ごめんねアリシア・・・今まで貴方の大切な妹に酷い事をしてきて・・・でもこれからは愛情をちゃんと注ぐわ・・・そして出来れば貴方も一緒に注いで欲しいわ・・・アリシア。

「フェイト・・・。」

「なあに母さん？」

「ジュエルシード集め続ける？貴方がしたくないならしなくてもいいわ。」

「えっ！？」

「だって危険な事もあるし・・・。」

「続けるよ・・だって母さんの研究に必要なんでしょ？私、母さんの役に立ちたい。」

「フェイト・・・でも・・・。」

「それに危険な事なら大丈夫！だってキルアが守ってくれるもん！」

「フェイト・・・うんそうね、キルア・・フェイトを絶対に守ってね。」

「当然だ。」

フェイトを守る事はすでに心に誓っているからな・・・。

「アンタら話すのもいいけど料理食べなよ。」

「あっ・・そうだねアルフ。」

「キルアの旅の話しを聞かせてもらおうかしら。」

「・・・本当に聞くのか？」

「聞く！」

「聞きたいわ！」

「本当に親子だな・・二人は・・・。」

このあとキルアはくたくたになるまで旅の話しをさせられた・・・。

溢れる思い・・・嬉しい涙（後書き）

キルア「話すというのは疲れるな・・。」

フェイト「でもキルアの旅の話しって凄かったよ！」

アルフ「本当にねえ・・・てかアンタが次元を越える事ができたのも驚いたよ！」

キルア「俺がプレシアの所に一人で行った時点で気づくべきじゃないか？」

アルフ「えっ！？」

フェイト「私、気づいてたよ。」

アルフ「あ、アタシだって気づいてたさ。」

フェイト「さっき驚いたって・・・。」

アルフ「あれはジョークだよ！」

キルア「（嘘だな・・・。）」

フェイト「それにしても凄いよね傷付いてもすぐに傷が燃えて直る人がいるなんて。」

キルア「実際、あの回復力は凄まじかった・・。」

作者「あの三人ともそろそろ・・・。」

フェイト「読者の皆さん次回もこの小説をよろしくお願いします！」

アルフ「読んでおくれよ！」

キルア「楽しんでもらえれば幸いだ・・。」

気を使える様になりたい金髪の魔法少女（前書き）

フェイトがキルアから気を学びます！

気を使える様になりたい金髪の魔法少女

「ねえ、キルア。」

「何だ？フェイト。」

「私、気が使える様になりたい。」

「・・しかし、フェイトには魔法があるだろう。」

「でも気が使える様になりたいの！」

「・・分かった・・しかしすぐに使える様には、なれんぞ。」

「うん！」

こうしてキルアによるフェイトの気の修行が始まった。

「・・・ねえ、キルア。」

「何だ？」

「立って、じっとしてるだけで気を使える様になるの？」

フェイトは不安げにキルアに問いかけた。

「いや、ならないが？」

キルアは真顔で使える様にはならないと答えた。

「えっ！？じゃあこれの意味は？」

「意味ならある・・これは自分の中の気を感じれる様になるための修行だ。」

「自分の中の気を・・・。」

「そう、まずは自分の中の気を感じられなければ気を使える様になる事を教えられん。」

「て、事はこれはキルアも通った道なの？」

「まあな・・。」

もっとも俺は一分で済んだがこれは言わんほうがいいな・・

「じゃあ頑張るよ！」

「ふむ・・では、まずは三時間・・頑張れよフェイト。」

「さっ、三時間！？」

フェイトは三時間もこの体制でいる事に驚いた・・しかしこれもキルアが通った道だと頑張る事にした・・。

三時間後・・・

「どんな感じだフェイト？」

「自分の中になんかこうポワってするものを感じる・・・。」

「それが気だ・・それにしてもポワっとか・・感じ方は人それぞれだしな・・・。」

「ねえキルア、私もう気を使える？」

「いや、まだだが？」

「えー、まだなんだ・・・。」

「気はそんなにいきなり使えるものではないからな・・・。」

まあ個人差もあるが・・何より戦闘一族なら生まれてからすぐに使えるだろうがな・・・。

「次は昼飯まで組手をしようか。」

「組手？」

「軽く戦うだけさ。」

「きっ、キルアと？」

「そうだが、こちらは一切攻撃はしない・・するのはフェイトだけだ。」

「そっ、そうなんだ良かった・・。」

「しかし、ただ攻撃をするんじゃない・・気を集中して攻撃するんだ。」

「気を集中・・・。」

「自分の中の気を攻撃する時の拳に集めたり・・という感覚だ。」

「うん、分かったよキルア。」

こうしてキルアとフェイトの組手が始まった！

「はあぁ！」

フェイトは真っ直ぐキルアに向かって拳を突きだした！

パシッ

しかしあっさり止められる。

「気を全然集中出来てないぞフェイト！あと拳を突きだす時はもっと脇を閉めるんだ！」

「はっ、はい！」

「しかし今の突きは中々良かったぞ。」

「ほっ、本当！」

「ああ、さあ次だ！」

「はい！」

二人の組手が始まってしばらくたち・・。

「いいぞフェイト！驚きだ！今日だけでここまで気を集中出来る様になるとはな。」

「そっ、そうなの？」

「それに格闘技の才能もあるかもな・・拳の打ち方や蹴りの放ち方が中々うまくなって来た。」

「それはキルアがどう直せばいいか教えてくれたから・・。」

「しかしそれを早くにも学んだのは紛れもないフェイトの才能だ。」

「そっ、そうかな・・。」

フェイトは照れながら頬を指でかいた。

「さて・・そろそろ組手は終わりにするか。」

「私、まだ続けたい！」

「そうか、なら続けよう。」
「いくよ！キルア！はあぁ！」
ガッ！
「また筋がよくなったな！」
「まだまだ！」
ヒュッ！シャッ！ビッ！
「いい動きの流れだ！」
「まだまだ良くなるよ！」
「その調子だフェイト！」
ヒュッ！ガッ！ドッ！
「いいコンビネーションだ！」
「えへへ・・次いくよ！」
「来い！」

フェイトはキルアとの組手に夢中になっていた・・特にキルアに誉められるのが嬉しいようだ。

二人の組手の時間がしばらく経つとアルフがやって来た。
「ちょっと二人とも昼の時間はもう過ぎてるよ！アタシはもうお腹ペコペコだよキルア！」
「それは済まなかったなアルフ。」
「ごめんね、ちょっと夢中になりすぎちゃった。」
「まったく・・・。」
「では・・大急ぎで飯を作るか。」
「私もお腹ペコペコだから早く食べたい！」
「まあ・・あれだけ動けばな・・今日の飯はちょっと豪華にするか。」
「わーい、やった！」
「今日はフェイトが気の鍛練を頑張ったからな・・。」
「次も頑張るよ！」
「うむ、毎日の積み重ねが大事だからな。」
「早く気を自由自在に使える様になりたいな・・。」
「使える様になるさ・・フェイトなら。」

「キルアにそう言われると嬉しいな。」
「何で俺にそう言われると嬉しいんだ？」
「・・・キルアの鈍感！！」
「何で急に怒ったんだ？フェイトは。」
「鈍いねえ・・キルアは。」
「感は鋭い方だと思うが・・？」
「戦いとかのはね・・・。」
「・・・？」
「こういうのは自分で気づくしかないよ。」
「努力しよう・・いったい何の感が鈍いんだ・・？」
「はぁ・・・」
フェイトも大変な恋をしたねぇ・・・と思い悩むアルフだった・・・。

気を使える様になりたい金髪の魔法少女（後書き）

作者「フェイトが気を学びましたね・・格闘魔法少女誕生か！？」

フェイト「格闘魔法少女かあ・・いいかも！」

キルア「だが、今のフェイトでは気を使った実戦はまだ厳しいな。」

フェイト「う・・そうだよね・・・。」

キルア「フェイト、俺は今のフェイトではと言っただけだぞ？」

フェイト「それって・・成長した私ならできるってこと？」

キルア「そうだ・・フェイトは才能があるからな。」

フェイト「私・・早く気を自由自在に使える様に頑張る！」

キルア「魔法の鍛練も怠ってはいけないぞ。」

フェイト「うん分かってるよ、キルア。」

作者「では読者の皆様こんな小説でしがどうか次回も見てください！」

フェイト「次回もよろしくお願いします！」

キルア「次回もできれば読んでくれ・・。」

謎の存在・・・

とある場所・・・ある御方の使者はそのある御方に報告をしにきていた。

「???様・・・報告したい事があるのですが。」

「報告しなくとも分かりますよ・・・ヒュプノ。」

「御存じでしたか・・・。」

「あの格闘家の事でしょう・・・。」

「はは、その通りでございます。」

「あの格闘家と金髪の魔法少女の出逢い・・・それは数奇な運命かもしれません・・・。」

「リリカルなのはのアニメとやらの原作とは違う方向へ向かわせるからですか？」

「それなら転生者もさほど変わらないでしょう・・・そもそもあの世界はリリカルなのはとやらのアニメと似ているだけ・・・必ずしも原作とやらと同じ道を歩むとは限りません・・・。」

「はは、その通りであります。」

「私達が手を加えたのもありますがね・・・。」

「左様ですね。」

ガシャ、ガシャ。

「おや・・・閃光の騎士ではないですか・・・閃華はどうしたのです？」

「いえ、閃華はまだ???様にお会い出来る様な身分ではないかと・・・。」

「そうですか・・・私は別に気にはしませんが・・・。」

「ありがたい御言葉、感謝致します・・・???様。」

「ところで閃光の騎士・・・私に何か用があるのではないですか？」

「私にあのキルアと言う男に接触する許可をくださいませんか。」

「別に構いませんよ・・・。」

「はは、感謝致します・・・???様。」

ガシャ、ガシャ。

「閃光の騎士は、あの格闘家に接触してどうするつもりでしょうか？」

「気にしなくていいでわないですか・・・閃光の騎士が何を行うにしても・・・それもまた彼等にとって試練なのです・・・。」

「はは、左様ですね。」

「人々が力（光）を求めた先にあるのは破滅の未来か、それとも・・・」

格闘家、温泉旅館へ（前書き）

キルア達が温泉旅館にタイトル通り向かいます！
あとフェイトがさらにパワーアップ。

格闘家、温泉旅館へ

フェイトの気の修行を始めてから数日・・・。

海鳴のとある温泉旅館の近くでジュエルシードの反応が見つかったらしい。

今日その温泉旅館に行く予定だ。

そして現在・・・俺は早朝からフェイトとある事をしていた。

そのある事とは・・・。

「いくよ！キルア！」

「ああ・・来い！フェイト！」

俺とフェイトは早朝から組手をしていた。

毎日の鍛練・・・それは強くなるために必要だからな・・。

それにしてもフェイトの成長率には本当に驚いたな・・。

まさか短期間でここまで成長するとは、確かに才能があるとは思ったが・・。

ヒュッ、ガッ。

「・・・キルア、集中してないでしょ？」

「ん？すまないな、フェイト。」

「でも、攻撃全然、当たらないんだよね・・・。」

「反射的に体が動いているからな。」

考え事をしている時にあの人達はよくイタズラで攻撃を仕掛けてくるからな・・・。

そんな経験をしたためか体の無意識のうちの反応が異常に良くなったんだよな・・・。

「フェイトは、だいぶ気が大きくなったからな・・・。」

そろそろ気弾や武空術を学んでもいいかもしれない・・・。

「フェイト、そろそろ組手は終わろうか。」

「えー、もう終わるの？」

「結構長い時間したと思うが・・・それよりもフェイト、最後に気弾と武空術を学んでもらう。」

「気弾？武空術？」

「武空術は俺が飛ぶときに使っているもので、気弾は自分の中の気を外に撃ち出すものだ。」

「なるほど。」

「どちらも気を使った戦いにおいては基礎となる重要なものだ。」

「はい！」

「まずは気弾からいこうか。」

「気弾・・どう放てばいいんだろう？」

「自分の掌に気を溜めるように意識するんだ。」

「うん分かった、はあぁ・・・。」

フェイトは自分の中の気を掌に溜めるように意識した。

「いいぞ、掌に気が集まって来た。」

「あっ！光の玉みたいのが・・。」

「フェイト、そのまま撃ち出すんだ。」

「うん・・はあ！」

フェイトは掌から気弾を撃ち出した。

そしてそれは・・キルアに当たった。

ボンッ！

「えっ！？ごめん、キルア！」

「いや別にいい、ダメージは無いからな。」

「それって私の気弾が弱いって事なのかな・・・。」

自分の気弾は弱いのかと落ち込んでしまうフェイト。

しかしキルアは言った。

「フェイトの気弾は気を学び始めた者にしては中々だぞ、ただ俺がフェイトよりも遥かに強いから効かないんだ。」

「確かにキルア、私よりも遥かに強いよね効かなくて当然か・・。」

「だがそのうち効くようになるかもしれない・・強さと言うものは常に変わっていく、フェイトが俺より強くなる可能性だってある・・そう、しゅ・・」

「修行を頑張ればでしょ？」

「ふ・・その通りだフェイト。」

「えへへ・・私頑張るよ、いつかはキルアの隣に立てるぐらいに。」

「いつかは隣にか・・頑張れ、フェイト。」

キルアは軽く笑みを作りフェイトにそう言った。

「あっ・・（キルアのあの顔、反則だよ！あんなに格好いいなんて！）」

「どうした？フェイト。」

「なっ、何でもないよ！」

「そうか・・ならいいが。」

「さあキルア、次は武空術の修行でしょ！」

「そうだな・・武空術は自分の全身の気をコントロールする事で、できる術だ。」

「全身の気をコントロール・・・。」

「フェイトなら、すぐに少し浮く位は出来る様になるはずだ。」

「よーし！頑張るぞ！」

このあと少し時間が経ち・・・。

「キルア！飛べる様になったよ、魔法で飛ぶのとは少し違う感じがする。」

「そうか・・それにしても凄いな、フェイトはここまで自由に僅かな時間で飛べる様になるとは・・・。」

キルアはフェイトの事をまさしく天才だなと心の中で思うのだった・・。

彼もその天才の中でも最上級に値するのだが・・・。

「さて、これで今日の修行は終わりだ・・温泉旅館に向かう準備をしようかフェイト。」

「うん、そうだねキルア・・でも本当によかったのかな、温泉旅館の近くにあるジュエルシードの探索をキルアだけに任せて・・。」

「別に気にする事はないフェイト、俺にはジュエルシードの封印が出来ないからな・・探索に駆り出すのは当然だ。」

「早く見つけて戻って来てね、封印は夜に行うつもりだから・・。」

「分かっている・・早く見つけて戻れば温泉旅館を満喫出来るしな・・。」

「私、キルアと一緒に長く居たいし・・。」

「何か言ったか・・?」

「何でもないよ!それより温泉旅館に行く準備しよう。」

「そうだな。」

俺とフェイトとアルフの三人は温泉旅館に向かった・・。

「さて・・ジュエルシードを探すか・・。」

「気をつけてね。」

「まっ、アンタなら何があっても大丈夫だろうね。」

「ふ・・そこまで信頼されると嬉しいものだな・・では行ってくる。」

俺は温泉旅館の近くにあるジュエルシードの力を感じて場所を探った・・。

ジュエルシードの力を探るのにも慣れたので存外簡単に見つかった。

「さて・・場所は覚えたし、戻るか。」

俺がジュエルシードを見つけて旅館に戻ると前に会った事がある高町なのはと言う少女にアルフが絡んでいた。

なのはの側にいる少女らは、なのはの友人だろう・・。

「何をしている？アルフ。」

「あっ、キルア早かったねえ・・いやちょっとね、こいつはこの前聞いた高町なのはって言うジュエルシードを集めてるもう一人の魔法少女なんだろ・・だから。」

「ジュエルシード集めから手を引け・・そう言っていたんだろう？」

「その通りさ。」

「だが今、言う事でもないだろう・・ここは旅館だ今はそういういざこざは無しにしよう。」

「うっ、分かったよ。」

「うちの連れが迷惑をかけて済まなかったな。」

「あっ、はいキルアさん。」

「今は普通にゆっくりしているといい・・。」

「あの・・キルアさん。」

「何だ？」

「フェイトちゃんもここに来ているんですか？」

「ああ・・来ているぞ。」

「そうですか・・。」

「だが今はジュエルシードを賭けて戦うとかは無しだここは暴れる所では無い、安らぐ所だろう？」

「はい・・そうですね。」

「では部屋に戻るぞアルフ。」

「分かったよ、キルア。」

キルアとアルフは自分達の部屋に向かって行った。

「ねえ、なのはあの人と何話してたの？」

「はぁ・・・キルアさん。」

「なのはちゃん？」

「おーい、なのは。」

「やっぱり、格好いいなあ・・。」

「・・駄目だこりゃ。」

キルア達の部屋・・・

「フェイト、ジュエルシードのある場所は見つけたぞ。」

「本当！ありがとうキルア。」

「あとさっき高町なのはに会った。」

「・・と言う事は。」

「まあ夜に間違いなく対辞するだろうな。」

「うん・・だね。」

「さて・・俺は少し温泉に浸かって来るか。」

「あっ、私も行く。」

「アタシも行くよ。」

三人は温泉に浸かりに行った。

「ふぅ・・・いい湯だ。」

しかしこう温泉に浸かるとあの人達の事を思い出すな・・・。

悪ふざけで湯に浸かってる時に足に凍結魔法を仕掛けてきたり、電撃を流してきたりか・・・。

湯の中で急に勝負を始めたりもしていたな・・。

女湯・・・

「アルフ、やめようよ。」

「何でだいフェイト。」

「やっぱり覗くのは良くないよ。」

「でも見たいじゃないかキルアの裸、フェイトだって見たいんだろう。」

「確かにあの筋肉の引き締まった体は気になるけど・・・。」

「だろう？」

「でもぉ・・・。」

「ちょっと見るだけ、ちょっと見るだけ。」

アルフは覗こうとするが・・

「アルフ、覗こうとしているのは分かっているぞ。」

「えっ！？」

「フェイトに悪影響を与える行動をするな。」

「あっ、悪影響だなんて・・・。」

「覗きは悪影響じゃないのか？」

「あっ、悪影響ですゴメンナサイ。」

「分かれば良い。」

「ほら、アルフ怒られたでしょう。」

「キルアのケチ。」

「いや、それおかしいよアルフ。」
なんやかんやで三人はのんびり湯に浸かった・・・。
そして夜・・・ジュエルシードのある場所へ。

「あそこだ、フェイト。」
「うん、じゃあ封印を始めるよ・・お願いバルディッシュ。」
『ｙｅｓ，ｓｉｒ』
フェイトはジュエルシードの封印を始めた・・・そして封印は無事に成功した。
封印が終了した直後、なのはとユーノがやって来た。
「くっ、一足遅かったか。」
「また会ったねフェイトちゃん・・。」
「うん、そうだね。」
「やっぱり戦わなくちゃいけないのかな？」
「ジュエルシードを集めてる限りはね。」
「話し合いでどうかならないかな？」

「じゃあ、ジュエルシードを全部渡して。」

「それはできないよ。」

「じゃあ戦うしかないね・・・ジュエルシードを賭けて、お互いに一つずつ。」

「やるしかないんだね。」

「バルディッシュ・・今回は私だけで戦ってみたいの・・悪いけど今回は一緒に戦えない、ごめんね。」

フェイトはバルディッシュに謝る・・しかしバルディッシュは別に気にしなくてもいいですよと言う。

「ありがとう・・バルディッシュ。」

「デバイス無しで戦う!?何を考えているんだ彼女は!?」

「今のフェイトは、デバイス無しでも相当強いんだよ、フェレット。」

「そんなわけ・・でもこれでなのはの勝ちは決まりだ!」

フェイトがデバイス無しと言う事でなのはの勝利を確信するユーノ・・しかしその考えは直ぐにひっくり返される。

「フェイト、前にも言ったが気と魔力は相当の鍛練がなければ同時に使えば反発する・・だから気を使う戦闘をする時は魔力を押さえ

るんだ。」

「うん、分かってる。」

「じゃあいくよフェイトちゃん。」

「私は負けない！」

フェイトとなのはの二人はお互いに戦闘体勢に入った。

「この勝負すぐに終わるね、なのはの勝ちで。」

何故か自信満々にそう発言するユーノ・・・しかしにその言葉にキルアは・・・

「おい・・貴様、フェイトを嘗めすぎだ。」

「いや、でもデバイス無しで勝てるわけ・・」

ドガッ！

「がっ。」

「隙が多いよ貴方。」

なのははフェイトの拳を受けて怯んでいた。

「なっ、何だ！？あの子魔法無しで飛んでる！？それに何でただの拳がバリアジャケットを貫通するほどの威力があるんだ！？」

「フェイトの拳はただの拳じゃない気がこもっているのさ。」

「気！？」

何だそれはと驚くユーノ。

しかしそんな驚いているユーノはほっといて、キルアはフェイトとなのはの戦いをじっと見ていた。

「油断したようだな・・なのは。フェイトがデバイスを使わないと言う事で心に隙ができたか。」

冷静に分析を行うキルア。

このままいけばフェイトが勝つな・・そうキルアは考えているが、なのはが何か逆転の秘策を思いついたりしてフェイトが劣勢に陥る可能性もあるかもしれない・・そうも考えていた。

ユーノとは違いキルアは楽観的にはならなかった。

「くっ、ディバインシューター！」

なのはは桜色の魔力弾を放った、しかし・・・。

「これぐらいなら、気を集中すれば弾ける！」

フェイトは手に気を集中し魔力弾を全て弾いた。

「なっ！？なのはの魔力弾を素手で弾くなんてそんなバカな！？」

「くっ、ならこれならどう！」

なのははレイジングハートに魔力を溜めている、大技で来るようだ。

「砲撃魔法がくる！？・・・なら今考えた技だけどこれで・・・。」

フェイトは両手を後ろにやり頭上後方に巨大な光の玉を作りだした。

「む・・あれは。」

「何だ！？あの光の玉は！？」

「フェイト・・気弾の撃ち方を教えたばかりだと言うのに・・あれほどの技を生み出すとは・・凄いぞフェイト。」

「いくよフェイトちゃん・・ディバインバスター！！」

ドウッ！

なのはは桜色の直射砲撃魔法、ディバインバスターを放った！

そしてフェイトも・・

「食らえー！！」

ポヒュウ！

フェイトは頭上後方に作った巨大な光の玉を両手を前に突きだし放った！

そしてその光の玉はディバインバスターを撃ち破りなのはに直撃した。

ドーン！

「きゃあ！？」

「なのは！」

「勝負・・ありだな。」

フェイトとなのはの戦いはフェイトの勝利によって幕を閉じた。

「さあ、ジュエルシードを出して。」

「私は・・・まだ・・・。」

なのはが何か言おうとした時、レイジングハートからジュエルシードが出てきた。

「れっ、レイジングハート！？」

「主人思いの優しい子だね。」

フェイトはレイジングハートから出てきたジュエルシードを手にいれた。

キルアは戦いが完全に終了したのを感じるとなのはに近づいた。

「お前！なのはに何をするつもりだ！」
「これを飲め・・・。」
キルアは丸薬の様な物を取り出すとなのはに渡した。
「は、はい。」
ゴクン。
「あ、あれ？」
なのはがキルアから渡された薬を飲むとなのはの傷が全て癒えた。
「彼は何をしたんだ！？」
「回復薬を飲ませただけだ。」
「こんなに一瞬で傷が治る薬があるのか！？」
「なのは、出来れば他のジュエルシードも渡して欲しいんだが・・・。」
「それは出来ません・・・ジュエルシードはユーノ君のだから。」
「そうか・・だがジュエルシードを集めている限りはまた激突する事になるぞ。」
「キルアさんは何でジュエルシードを集めているんですか？」

「フェイトと約束したからだ。」

「そうですか・・一つ聞いていいですか？」

「何だ？」

「フェイトちゃんの目・・・最初に会った時と変わっている気がするんですけど・・。」

「確かに変わったな・・・まあ、フェイトだけでは無いが・・。」

変わったのはプレシアもだな・・。

「キルアさんには助けられた事があるけどジュエルシード集めは譲れません。」

「それはこちらもだ・・。」

「キルア！何でそいつの傷を治しちゃたのさ！」

「いいんだよアルフ、私もあの子が傷ついたままなのは嫌だし・・。」

「フェイト、アルフ・・旅館に戻って寝るか。」

「こんな戦いのあとに僕らと同じ旅館にいるのか！？」

「一つ言っておくフェレット・・・俺の知っているある人の言葉にこんな言葉がある。」

「何？」

「それはそれ、これはこれだから関係ねーよ・・・だ。」

「わ、訳がわからないよ。」

「なのはも戻ってゆっくり休むといい。」

「あっ、はい。」

「それにしてもフェイト、戦いの中で生み出したあの技は中々凄かったぞ。」

「そっ、そうかな。」

「で・・技名は何なんだい？フェイト。」

「技名か・・・考えてないや。」

「そのうち付ければいいだろう・・・。」

「そうだよね。」

「それにしても・・・・。」

フェイトの成長は楽しみだ・・そうキルアは考えながらフェイトとアルフとともに温泉旅館に戻るのだった。

格闘家、温泉旅館へ（後書き）

作者「いやーフェイト強くなったな・・もうこれは時空管理局のあいつより強いんじゃないかな。」

フェイト「時空管理局のあいつ？」

作者「こっちの話しだから気にしないで。」

キルア「それにしても気を使った初めての実戦であそこまで戦えるとは・・本当に凄いなフェイト。」

フェイト「キルアの指導が良かったからだよ。」

アルフ「それにしてもあのフェレットは物事を甘く見すぎじゃないかい？」

作者「確かにそうかもしれませんね。」

フェイト「魔力と気を同時に使えたらどんな感じ何だろう・・・？」

作者「（感想であった・・・ネギまのタカミチのあの技・・・いいかもしれない。）」

アルフ「んじゃそろそろ。」

フェイト「読者の皆様これからもこの小説をお願いします！」

アルフ「次も見ておくれよ！」

キルア「次回もよろしく頼む・・・。」

格闘家、遊園地に行く（前書き）

今回は再びほのぼの系！

格闘家、遊園地に行く

「フェイト、遊園地に行こうか。」

「えっ！？そ、それってデートの・・・」

「アルフとプレシアも連れてな。」

「あっ、何だそう言う事か・・・。」

家族で行こうって事かと少しガッカリするフェイト。

「何だ遊園地は嫌か？フェイト。それではこのもらった遊園地のチケットも無駄になってしまうな・・。」

「全然嫌じゃないよキルア！・・・あれ？そう言えばキルア何で遊園地のチケットを持っているの？」

「これはだな一人で外に修行に行った帰りに人を助けたら礼に貰えたんだ。」

「そうなんだ。」

「礼などいらなかったんだが押し付けられてしまってな・・。」

「でも母さんと一緒に遊園地か・・・楽しみだな。」

キルアと二人きりも良かったけどね・・。

「プレシアを呼んでくる。」

ビッ・・ビッ

「連れて来た。」

「フェイト、ジュエルシード集めで怪我はしてない？ちゃんと寝れてる？」

「だ、大丈夫だよ母さん。」

「本当、凄い変わりようだねえプレシアは。」

前までは考えられないよあのプレシアの姿はと思うアルフ。

「さて・・遊園地に行く準備をしよう。」

キルアは遊園地で食べる昼のために弁当を作り始めた。

「おや？どんな弁当にするんだい？」

アルフはどんな弁当になるんだろうとキルアが弁当作るのを見に来た。

「アルフ、見たら楽しみが減るぞ。」

「それもそうだね。」

キルアに楽しみが減ると言われアルフは弁当作りを見るのをやめた。

「キルア、私もお弁当作るのを手伝うわ。」

「そうか、プレシアよろしく頼む。」

遊園地に持っていくお弁当はどうやらキルアとプレシアの合作になるようだ。

「キルアとプレシア、仲良く料理してるねえ・・あれが夫婦の姿って奴かね。」

「えっ！？キルアと母さんは年が離れているから夫婦はないと思うよ！？」

「でも年の離れた夫婦もいるし・・・・。」

「でもキルアと母さんが夫婦とか絶対ダメ！」

「力を込めて言うねえ・・・そんなにキルアが好きかい？」

「えっ！？あっ・・・。」

顔を真っ赤にするフェイト。

「隠さなくても分かるよ同じ男を好きになったんだから。」

「えっ！？同じ男って・・・・。」

「アタシもキルアの事が好きになったのさ、強いし頼りがいがあるしね。」

「うん・・あと、とっても優しい。」
「そうだね。」
「恋のライバルだねアルフ。」
「これは譲れないよフェイト・・・てかライバルはプレシアもだね。」
「えっ！？」
「プレシアも明らかにキルアに好意を抱いているからね。」
「かっ、母さんもキルアが好きだなんて・・・。」
「準備出来たぞ、フェイトにアルフ、遊園地に向かうぞ。」
「フェイト、お弁当頑張ったから楽しみにしてね。」
「う、うん・・母さん。」
「どうしたのフェイト？」
「なっ、何でもないよ！」
「それなら良いけど・・・。」
「それよりも早く行こう！」

キルア達は遊園地向かった。

遊園地・・・

「うわあ・・色んな物がいっぱいだ。」

目を輝かせながらフェイトは遊園地のアトラクションを見ていた。

「うふふ、見てるだけで楽しそうね。」

「そうだな。」

それにしてもこういう場所に来ると異常なまでに頑丈な人と小さい動物を思い出すな・・・。

「ねえあれ乗ろう！」

「メリーゴーランドか。」

「良いわね乗りましょう。」

キルア達はメリーゴーランドに乗った。

「ふむ・・始めて乗るがこんな感じか。」

「何かある意味新鮮な気分ね。」

「馬さんが上下に動く～。」

「ん～アタシには合わないね。」
キルア達はメリーゴーランドを乗り終えた。
「楽しかったね。」
「次は何をするのフェイト？」
「んー・・・じゃあ、あれに乗る！」
フェイトが指差したのはコーヒーカップだった。
「一カップに二人までの様だな。」
「じゃあ私キルアと乗る！」
「ずるいよフェイト！アタシだってキルアと一緒に乗りたいよ！」
「何故、二人は俺とそんなに乗りたいんだ・・？」
「こういう時はジャンケンで決めればいいんじゃないの？」
プレシアがそう提案する。
「そうだね、母さん。じゃあ行くよアルフ。」
「分かったよフェイト。」
「待って私も一緒にいいかしら。」

「母さんもキルアと一緒に乗りたいの？」

「いや、私はちょっとジャンケンがしてみたくなっただけ・・・。」

しかしプレシアも心の中ではキルアと一緒に乗りたいと思っている。

「・・・いいよ母さんも一緒にやろう。」

「行くよジャンケン・・」

「「「ポンッ。」」」

フェイト→グー

プレシア→グー

アルフ→パー

「やったー！アタシの勝ちだー！」

「まっ、負けた・・・。」

「残念ね・・・。」

「アルフ、何故そこまで喜ぶんだ？」

「全くキルアは鈍感だねえ・・・。」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないよ、さあ乗ろう。」
コーヒーカップに乗るキルア達。
「母さんもっと回すよ。」
「ふふ、まだまだこれぐらい平気ね。」
「おらおらどんどん回すよー！キルア！」
凄い早さでコーヒーカップを回すアルフ、しかしキルアは凄く平気そうな顔をしている。
「風が気持ち良いな・・。」
「これだけ回したのに平気な顔してる！？・・・と言うより何かアタシが気持ち悪くなって来た・・・うぷっ。」
「どうしたアルフ？気分が悪くなったか？」
「うん・・・ちょっと・・・。」
アルフはコーヒーカップから降りたあとキルアに背中を擦ってもらった。
「気分は良くなったか？」
「うん・・・何とか。」
「調子に乗って回しすぎるからだよアルフ。」
「反省してるよ・・・・。」

「次のアトラクションに行ったらそのあと昼御飯にしよう。」

「そうだねキルア。」

「次は何処に行くの？フェイト。」

「お化け屋敷！」

「お化け屋敷・・分かったわ行きましょう。」

お化け屋敷に向かうキルア達・・・しかしそこである人物と鉢合わせする。

「あっ！？」

「どうした、なのは知り合いか？」

「あっ、貴女は高町なのは！？」

「なのはでいいよフェイトちゃん。」

「あっ、うん・・・なのは貴女もここに来ていたんだ・・・・。」

「うん、お兄ちゃんと一緒に・・・その初めて見る女の人はフェイトちゃんのお母さん？」

「うん・・・そうだよ。」

「優しそうだね。」

「私の母さんだもん。」

「ねえ、キルアあの子が例の？」

「ああ、そうだ。」

「本当にフェイトと変わらない年ぐらいの子ね。」

「だがジュエルシードを集めると言う意思は強い。」

「そうなの・・・私はフェイトにジュエルシードを集めさせるためにあの子を傷付けさせてるのね・・・。。」

「プレシア・・・。」

「今更こんな風に善人ぶってもね・・・私はフェイトに貴方と出会う前は酷い事をした悪女なのに・・・。」

「自分に罪悪感を感じる人間と感じない人間は違う。」

「え？どう言う事？」

「自分に罪悪感を感じるなら自分の中の罪に向かい合っている・・しかし感じないなら目を背けている・・お前は向かい合っている人間だろう？プレシア。」

「そう言われると少し胸が楽になるわ・・・私はちゃんと向かい合っているのね・・・。」

「ああ・・・それにジュエルシードはなのは達には手に余るかもしれん・・・。」

「えっ？それはどう言う・・・。」

「あのキルアさん、一緒にお化け屋敷に入りませんか？」

「別に俺は構わないが・・・フェイトは？」

「私も別に構わないよ。」

「そうか。」

「待て、俺が構うぞ胴着を着た男と一緒に、なのはをお化け屋敷に入らせるか！」

「お兄ちゃん、何で胴着を着てたら駄目なの！」

「いや、胴着を着てなくても駄目だが胴着を私服にしている変な奴を妹と一緒にお化け屋敷に入らせる兄はいない！！

「お兄ちゃん！ごめんなさいキルアさん。お兄ちゃんが失礼な事を言って。」

「いや、別に気にしてない。」

「キルアさんは心が広いですね。」

頬を赤く染めながらキルアにそう言うなのは・・・それになのは兄が反応した。

「はっ！まさか・・・妹をたぶらかしたなクソ野郎！！」

キルアに襲いかかるなのはの兄・・・しかし。

チョン。

「がはっ！？」

キルアが軽く拳を当てると気絶した。

「ちゃんと軽くやったんだが・・・気絶したな・・済まないな、なのは。」

「いや、いいんです・・・お兄ちゃんには少しこのままでいてもらいます。」

「放って置いていいのか？」

「はい、いいんです。」

笑顔ながら怒気を込めた声でなのはは言った。

「じゃあお化け屋敷に入るか。」

キルア達は気絶したなのはの兄を放って置いてお化け屋敷に入った・・・。

「む・・意外にリアルだな。」

「お、思ったより怖い・・・・。」

「か、母さん・・・・。」

「つ、作りものよ・・・こんなの・・・だ、だから大丈夫よフェイト。」

「プレシア、アンタ声が震えてないかい？」

「き、気のせいよ。」

う゛あ　あ　あ　あ　・　・　・　・

「ひっ！？何！？」

「変な声、聞こえた・・・・。」

「あ、アルフあっちから声がしたから見て来て・・・・。」

「何でだい！？プレシアが行けばいいだろ！？」

「俺が見て来よう。」

「気をつけてキルア・・・・。」

「死なないでくださいキルアさん。」

「呪われないようにねキルア。」

「アンタらこれアトラクションだよ。」

「ん？」

キルアが声のした方に行くと・・・

「ヴァァァ・・・オマエノタマシイヨコセ。」

スッゴいリアルなゾンビの作りものが出てきた。

「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？」」」

「うわ、気持ち悪っ。」

フェイト、なのは、プレシアが叫んでアルフはゾンビの見た目を気持ち悪がった。

「ふ・・これぐらい何とも無いな・・・・それよりもフェイト、プレシア、なのはそろそろ離れてくれないか？」

フェイト、プレシア、なのはは怖がってキルアに抱きついていた。

「あっ、ごめん。」

「すみません。キルアさん。」

「こ、怖かった。」

「怖がったふりして抱きつく、その手があったとは！」

「何を言っているんだ？アルフ。」

「こっちの話だから気にしないでいいよ。」

「そうか・・とりあえず先に進もう、じゃないとお化け屋敷から出られないぞ？」

「ここまで怖いなんて・・・早く出たい・・・。」

「あっ・・・怖がった時に思いっきりユーノ君握っちゃった・・・。」

「（ひっ、酷いよなのは・・・）」

「このお化け屋敷何でこんなにクォリティ高いのよ・・・。」

「こんなもの本物に比べたら全然大したことはないさ。」

「キルア、アンタ本物にあった事あるのかい・・・。」

「まあな。」

「ほっ、本物ってどれくらい怖いんだろ・・・。」

「かっ、考えない方がいいわ・・・フェイト。」

キルア達は怯えながらもお化け屋敷を進む（キルアとアルフは怯えていない。）。

「そ、そろそろ終わりかしら・・・。」

「出口は近いようだ。」

「このお化け屋敷本当に怖かったよ・・・。」

「ここに来るまでにユーノ君何回も握り閉めちゃったし・・・。」

「（何か・・・うっすらと川が見えてきた・・・）」

「早くお昼食べたい。」

出口を前に気を抜く者達・・・しかし大抵お化け屋敷と言うものは安心しきった時に一番怖いものがくる。

ガシッ

「あれ？足を何かが掴んでる・・・。」

フェイトが恐る恐る足下を見ると・・・。

「ヴ・・ァァァア・・・地底ノ世界ニオイデ。」

「ウスグラクテキモチイイヨ。」

地面からゾンビが大量にでてきた。

「「「きゃぁぁあああああああああ！！！！？」」」

走って逃げるキルアとアルフを除いた三人。
「・・・そんなに怖いか？これ？」
「アタシは平気だね。」
「俺達も出るか・・・。」
「そうだね。」
キルアとアルフも三人に続いて出ていった。
「はあ・・・はあ・・・怖かった。」
「心臓に悪いわ・・・。」
「ユーノ君、握り締めたまま走っちゃった・・・。」
「（・・・それに乗ればいいんだね・・・。）」
「さて・・・そろそろ昼にしようか。」
「どんなお弁当かね。」
「お弁当どんなの作ったの母さん？」
「見てからのお楽しみよ。」

「お弁当かあ・・・。」
「多めに作ったから、なのはも一緒に食べるか？」
「良いんですか！？」
「フェイト、構わないか？食事は大勢で食べる方が美味しいと思うが？」
「うん、別に良いよ。」
「ありがとう！フェイトちゃん！」
「さて・・・では、場所を移動しよう。」

キルア達はお弁当を食べれる場所に移動した。

「うわあ、凄く美味しそう！」
「どれが母さんが作ったのでどれがキルアが作ったのだろう？」
「食べて、当ててみて。」
「うん！いただきます！」
パクッ・・モグモグ。
「これは・・・母さんが作ったの？」
「いや、それは俺が作ったのだ。」

「酷いわフェイト、私が作ったの分からなかったの・・・・。」
「えっ！？ご・・」
「冗談よ、フェイト。」
「えっ！？もう母さんったら！」
「ふふふ、ごめんねフェイト。」
「何かいいですね・・・こういうの。」
「そうだな・・・。」
バクバクモグモグ
「うん、本当に美味しいねこれ。」
「俺達も食べようか・・。」
「そうですねキルアさん・・・あのちょっといいですか？」
「ん？何だ？」
「あーん。」
なのはは箸におかずを掴んでキルアに向けていた。
「何だ・・・？」

「あの口を開けてください・・・。」
「口を？」
「はい、口・・・」
「ちょっと、何やってるの！キルアにあーんだなんて私がやりたいよ！」
「フェイト、口から凄い事が出てるよ。」
「あーんって何だ・・・？」
フェイトとなのははで、ひと悶着あったが基本食事は楽しく終わった。
「お昼ありがとうございます。」
「いえ、別に良いのよ。」
「ではそろそろ私はお兄ちゃんの所に戻ります。」
「そうか・・・所でそのフェレットさっきからぐったりしてるんだが・・・。」
「あっ、本当だ？ユーノ君疲れて寝ちゃったのかな？」
「・・・・・・・・。」

「フェイトちゃん。」

「何？」

「次のジュエルシード渡さないよ。」

「私だって譲れない。」

「じゃあね、フェイトちゃん。」

「・・・うん、なのは。」

「フェイト、次は何処へ行く？」

「次はね・・・・」

このあとキルア達は色々なアトラクションに行った・・・そして最後に・・・・。

「観覧車からみる風景って空を飛んでみる風景とは違うね母さん。」

「そうね・・・・フェイト。」

「母・・さん。」

「どうしたのフェイト？。」

「眠く・・・・なっちゃった・・・・。」

そう言ってプレシアの膝に頭を置くフェイト。
「遊び疲れたのね・・・。」
「ああ・・・アルフもだな・・・。」
アルフはキルアの膝の上に寝ていた。

「二人も寝た事だし今貴方にある事を話すわ・・・。」「何だ・・・？」
「フェイトは、クローンなの・・・私の娘アリシアの・・・。」
「そうか・・・。」
「私は最初はこの子をアリシアの変わりとして産み出した・・・でもこの子はアリシアの変わりにはならなかった・・・。」
「それは当然だ・・・この世に全く同じ人間など産まれはしない・・・。」
「そう・・・その通りよ・・・なのに私はあの子を失敗作などと思ってしまった・・・あの子は失敗作などではなくフェイトとと言うもう一人の娘だったのに・・・。」
「今はちゃんとフェイトを愛せているだろう・・・。」「貴方のお陰よ全部。」
「大した事はしていない・・・。」
「それと私がジュエルシードを集める理由・・・それはアリシアを生き返らせるためよ・・・。」

「生き返らせるか・・・。」
「貴方は生命の理に反しているって言う？」
「いや・・大切な者を生き返らせたいと思うのは普通だろう・・・。

」
「そう・・・普通なのね・・・。」
「ただその為に他の誰かを犠牲にするのはいかんがな。」
「そうね・・・私は貴方と会うまではフェイトを犠牲にしてたわね・・・道具として扱っていたんだもの・・・・。」
「今は違うだろう？」
「ええ・・・そうね・・・。」
「所で一つ良いか？」
「何？」
「ジュエルシードを全部集めて使ったら・・・全部壊して良いか？」
「ロストロギアを壊すって・・・貴方にならできそうねキルア・・・ええ良いわ。」「了承確かにもらったぞ・・・そろそろ下に着くな・・・プレシアはフェイトを抱えてくれ・・・俺はアルフを抱える。」
「ええ・・・分かったわ。」

こうしてキルア達の一日は終わりを告げた・・・。

格闘家、遊園地に行く（後書き）

作者「今回の後書きはキルアさんとプレシアさんに出てもらいます。」

プレシア「キルアと二人きりだなんて・・・緊張するわ・・・・。」

キルア「そんなに緊張する事は無いと思うが・・・・。」

プレシア「今日の話、何か間を全然開けてない所があったけどあれは・・・・？」

作者「あー・・・あれは、お二人の会話にスピーディー感を持たせようとしたんでわざとです。」

キルア「読みにくい気もするが・・・・？」

作者「んー・・・そうですねでもあれでいきたかったんです。」

プレシア「それにしてもロストロギアを壊すだなんて・・・キルアは考える事が違うのね・・・・」

キルア「俺の知っているあの人達の中の殆どはこんなもんぶっ壊すって言うと思うが・・・・。」

プレシア「貴方の世界が変わってるのね・・・・。」

キルア「否定は出来んな・・・・・。」

作者「ではそろそろお二人さんお願いします。」

プレシア「読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしくお願い致します。」

キルア「次回もどうか読んでくれ。」

金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる（前書き）

作者「更新が遅くなって申し訳ありません。早く更新できるように頑張りたいと思います。」

金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる

「キルア！私、新しい技が欲しい！」

フェイトはキルアに突然そんな事を言い出した。

「新しい技？フェイトには、あの時なのはを倒した技があるからまだいらないんじゃないか？」

「気を使った技がフォトンバスターだけなのは、なんか寂しいよ！」

あの時の技の名前はフォトンバスターに決まっていたようだ。

「しかし、まずは一つの技の質を高めるのが重要なんだが・・・。」

「でも一つだけじゃバリエーションが少なすぎるよ！」

「ふむ・・一理あるな。」

「だから技を教えて！」

「分かった・・・しかし気を使った技だけではなく魔法も教えよう。」

「キルア、魔法使えないのに魔法教えられるの？」

確かにキルアは魔法が使えない、そのキルアが魔法を教える事が出来るのだろうかフェイトが疑問を持つのは当然である。

「確かに俺は魔法を使えない・・・だが教える事は出来る。」

「え？何で？」

キルアの教える事が出来ると言うはっきりとした発言にフェイトは

頭に？マークを浮かべる。

「魔導書を持っているからな・・・使えなくとも理論などは理解している。」

「キルア、魔導書持ってたの！？」

驚くフェイト、当然だろうキルアは格闘家だ。

魔導書は普通に考えて必要ない。

「旅に出る時の餞別に貰ったんだ。」

「何で魔導書をあげたんだろう？」

フェイトがそう考えるのも仕方ない、だってキルアは格闘家だもの。

「戦いにおいてあらゆる技術を知るのは大事・・・この本を読めばその知識が役に立つ事もあるだろうと言う事でな。」

「なるほど魔法への対処法を知ると言う事においては格闘家にも魔導書は役に立つと言う事何だね。」

「ああ、そう言う事だ・・・だが。」

キルアは若干表情を崩し苦笑いをした。

「この本に書いてある魔法・・・高等な物が多くてな、中々この本に書いてある魔法に通ずる魔法を使う相手には巡り会わなかった。」

「え・・・？それって・・・。」

「この本の知識は余り役立ってないな・・・魔法は経験で殆ど対処法を覚えてしまったな・・・。」

「そっ、そうなんだ・・・。」

フェイトはこの魔導書を書いた人は高レベルの魔導士何だろうけど、自分基準で魔法のレベルを考えていたのかな？と思った。

「ちなみに・・・これは初級偏だ。」

「ええっ！？」

初級偏でキルアに高等とか言わせる事が出来るの！？と驚くフェイト。

「この魔導書の中からフェイトに合う魔法を覚えてもらう。」

「覚えられるかなあ・・・。」

フェイトは魔法を覚えられるか不安になった・・・それはそうだろう、初級偏なのに高等とか言われれば。

「フェイトなら修得出来るさ。」

「そ、そうかな。」

キルアに自分なら修得出来ると言われ嬉しくなるフェイト。

「さて・・誰にも迷惑のかけない場所に移動して修行を始めよう。」

「うん、頑張るよ！」

キルア達は誰にも迷惑のかからない場所に移動した。

「アルフ、置いてきて良かったのかな・・・。」

「修行に巻き込んだら不味いだろう・・・。」

キルアはアルフが修行の余波に巻き込まれたら不味いとフェイトに言う。

「確かにそうかも・・・。」

「アルフはとびっきり美味い飯を作ってやると言ったら機嫌を直したから気にするな。」

アルフは結構単純な事で機嫌を直していた。

「さあ、魔法を教えよう。」

「どんな魔法かな？」

フェイトはどんな魔法か期待を膨らませる。

「フェイトは雷系の魔法が得意だから当然、雷系の魔法だ。」

「どんな雷系の魔法なの？」

フェイトはキルアに聞いてみる。

「天空より現れし雷の龍が敵を喰らう魔法だ。」

「それ本当に初級魔法！？」

確かに初級に思えない響きがする。

「・・・そうだな確かに初級魔法には思えないな。」

「これ書いた人どんな感覚何だろう・・・。」

フェイトは改めてこの魔導書を書いた人は凄いけど感覚ずれてるなと思った。

「悪い人では無いらしいんだがな・・・。」
「でも、ずれている人だね・・・。」
「ああ・・そうだな。」

「それで、その魔法どんな風に使うの？」
「詠唱を唱え指に魔力を集め魔方陣を描く事で発動するんだ。」
「な、何かやっぱり難しそうだね・・・。」

フェイトは本当に出来るか不安になる・・・。

「とりあえず一回やってみよう・・・ただ。」
「ただ？」
「一回で魔力が空になるかもしれん・・・。」
「そ、そうなの？」

フェイトは一回で魔力が空になると言うキルアの言葉に少し動揺した。

「この魔導書の中では魔力消費は一応少ない部類何だが・・・。」
「書いた人の基準が高かったんだよね・・・。」

これ書いた人、本当にどんな凄い魔導士何だろうと思うフェイト。

「まあ・・とりあえず俺に向かって放ってみてくれ。」
「い、いいの？」
「ああ構わない、詠唱と魔方陣の描く動きをするから真似てみてくれ。」
「うん、分かったよ。」

キルアは詠唱と魔方陣を描く動きをする。

「天空に集まれ雷よ・・・」
「天空に集まれ雷よ・・・」
「雷よ荒ぶる龍の形となりて・・・」
「雷よ荒ぶる龍の形となりて・・・」
「我が前に立ちはだかる敵を喰らわん・・・」
「我が前に立ちはだかる敵を喰らわん・・・」
「ドラゴボルディアス！」
「ドラゴボルディアス！」
カッ！ドッッガッーン！！ゴロゴロ！バチッ！バチッ！ピシャアアアッ！！バリッ！バリッ！グォォォォォ！！
天空より現れし雷の龍がキルアに直撃した。
「きっ、キルア！？大丈夫！？」
フェイトは魔法が直撃したキルアを心配する。
「大丈夫だ、フェイト。」
キルアはピンピンしていた。

「よっ、良かった・・・。」
「それよりもフェイト、魔力はまだ残ってるか？」
「キルアの言った通り空になっちゃたみたい・・・。」
フェイトは疲れた顔でそう言う。
「そうか・・少し休むか？」
「休まなくても大丈夫！次は気を使った技を教えてくれるんでしょ。」
フェイトはやる気満々の表情になりキルアにそう言った。
「そうか・・分かった次は気を使った技だが知り合いのある技を教えよう。」
「キルアの技は教えてくれないの？」
フェイトは少し残念そうにキルアに言った。
「俺の技は人にそう簡単に教えてはいけない技だからな・・・。」
何せ暗殺拳をベースに強化された技だからな・・・とキルアは思う。
「そう何だ・・・キルアの技、覚えたかったな・・・。」
「今から教える技もかなりの技だから落ち込むなフェイト。」
キルアはそうフェイトに言うがフェイトが落ち込んでる理由は技が凄いかどうかではなくキルアの技を覚えられないと言う所である。
「今から教える技はブレイクジャベリンと言う技だ。」

「ブレイクジャベリン・・・。」
「気を練り上げ、投げ槍を作り相手に投げつける技だ。」
「なるほど・・・。」
「今から俺が気を練り上げ投げ槍を作るからそれを良く見るんだ。」
「分かったよ。」
「さて・・始めるか。」

キルアは気を練り上げ自分の手の上に投げ槍を作る。

「凄い気の練りだ・・・この技を作った人この形状に合った気の練りをしてたんだ・・・。」
「分かるかフェイト、さすがだな。」
「これを私がするんだ・・・頑張らなきゃ！」

意気込むフェイト。

「俺が見て駄目な所があったら指摘するからさっそくやってみるんだ・・・フェイト、失敗を恐れるな。」
「うん、分かってる。」

フェイトはブレイクジャベリンを修得する為に気を練り上げる。

「はあぁ・・・。」
「フェイト早く練り上げようとするのはいいが雑になってはいけない・・・まずはゆっくりでいいんだ。」
「はい！」

フェイトはキルアに言われゆっくり丁寧に気を練り上げる。

「ふむ・・いい感じだ。」

「そ、そう？」
「ああ・・ブレイクジャベリンが出来たら試しに俺に投げてみるんだ威力を確かめたいからな。」
「うん、分かったよ。」
フェイトは気を練り上げブレイクジャベリンを完成させた。
「や、やっと出来た・・・行くよ！キルア！」
「さあ来い！」
「ブレイクジャベリン！」
ビュオ！カッ！
「ふむ・・中々良い威力だぞフェイト。」
「でもキルアには全然効いてないけどね・・・。」
「それは、まだまだレベルが違うから仕方ないと思うが？」
「でもいつかはキルアに効くぐらい強くなるもんね！」
「ふ・・そうだなフェイト・・・次はもう少し気の練りを早くして今ぐらいのを作って貰おうか。」
「うん、頑張る！」
フェイトのブレイクジャベリン修得の修行はまだ続いた・・・そして。
「これなら実戦でも大体いけるな。」
「そ、そうかな・・・。」
フェイトはブレイクジャベリンを実戦でいけるぐらいレベルまで修得したが疲労が溜まっているようだった。

「フェイト、そろそろ帰るか？」
「ううん・・・あとちょっとこの技に一工夫を加えたら。」
「工夫？何か思いついたのか？」
「キルア、気もさ性質を変えて雷の力とか加えられるんじゃないかな？」
「まあ・・確かに性質を変化させる事は出来ない事はないな。」
実際、キルアの技にも気の性質を変化させた技はある。
「じゃあ私やってみるよ！」
「挑戦するのは良い事だな。」
「はあぁ・・・・。」
バチッ、バチッ。
フェイトは気を練り上げる・・・するとフェイトの作る気の投げ槍が雷を纏う。
「いきなりやってのけるのか・・・凄いなフェイト。」
「で、出来た・・・やってみたら本当に出来た！」
フェイトは気の性質を変化させる事が出来て嬉しそうにする。
「あ・・・あれ？」
フェイトは急にふらっとして倒れそうになるが・・・キルアがフェイトを抱き抱えた。
「少し無理をしすぎたようだな・・・。」
「ご、ごめんキルア・・・。」

「謝る事は無い・・・よく頑張ったなフェイト・・・あれはもう別の技と言ってもいいものになっていたぞ・・・。」
「そ、そうかな・・・じゃあ名前はボルテックジャベリンにしようかな。」
「良いんじゃないか？さあ・・そろそろ帰ろうフェイト。」
「うん・・・でも魔法の方は一応一回成功したけど実戦じゃ不安だな・・・一回しか使えないし。」
「魔力向上の基礎練を頑張れば何回も使えるようになるさ・・・それに、あれはまだフェイトには早かったかもしれんしな・・・。」
「そうだね・・・でもすぐに使えるようになるからね！」
「その調子だフェイト・・・さあ帰ろう。。」

キルアはフェイトをお姫様抱っこで抱える。

「きっ、キルア！？」
「フェイトは気と魔力を殆ど使い果たして飛べないから抱えて飛ぼうと思ったんだが・・・嫌だったか？」
「い、嫌じゃないよ！」
「そうか・・・ならちゃんと掴まるんだぞ。」
「う、うん・・・。」

フェイトは顔を赤くしながらキルアにしっかり掴まった。

「（キルアにお姫様抱っこされてる・・・幸せだな・・・。）」

そんな事を考えながらフェイトはキルアと共に帰路についた・・・。

フェイトは今日の一日で大きな成長を果たしたのだった・・・。

金髪の魔法少女、新しい技を手に入れる（後書き）

フェイト「私、新しい魔法と気を使った技を修得したよ！」
アルフ「おめでとうフェイト！」
作者「フェイトは順調に強くなってますね。」
キルア「そうだな、これからの成長も楽しみだ。」

アルフ「作者、更新遅くない？と言うより今回アタシ出番なかった！」
作者「更新遅かったのは、色々あって携帯を使えなかったんです・・・。」
キルア「出番の方はスルーか・・・。」
作者「更新早く出来るように頑張りたい。」

アルフ「出番は！？」
作者「次回はちゃんとありますよ（たぶん・・・）。」

フェイト「読者の皆様今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」
キルア「出来れば次回も読んでくれ。」

作者「今後もこの小説をよろしくお願いします！」

金髪の魔法少女と白き魔法少女　つきすぎた実力の差（前書き）

日付が変わる前に更新できなかった・・・。

金髪の魔法少女と白き魔法少女　つきすぎた実力の差

キルア達は今、ジュエルシードがある場所に来ていた。

「街中にあるとはな・・・ジュエルシード。」

「強制発動をさせて見つけようか？」

フェイトの出した提案にキルアは答える。

「いや、そんな事をしなくてもジュエルシードの力の感覚は覚えたから見つけられる。」

「アンタの探知能力ってどんだけ凄いんだい。」

キルアの探知能力に脱帽するアルフ。

「慣れれば簡単なものだ・・さて・・見つけてくるか。」

キルアはジュエルシードを探し向かう。

「キルアって本当に凄いねえ。」

「そうだね。」

フェイトとアルフが少し喋ってる間にキルアは戻ってきた。

「見つけたぞ・・ジュエルシードのある場所に連いてきてくれ。」

キルアはフェイトとアルフを街中のジュエルシードがある場所に連れて行く。

「あ、あった。」
「フェイト、封印を始めてくれ。」
「うん。」

フェイトはバルディッシュを起動させジュエルシードを封印した。

「封印終了！」
「やったね、フェイト！」「だが・・恐らく今回も。」

キルアは彼女達が来るだろうな・・・と考えた。

「くっ、また先を越されたか！」
「フェイトちゃん・・・。」

キルアの考え通り、なのはとユーノがやって来た。

「今回もジュエルシードはアタシ達が頂いたよ！」
「本当に君達はジュエルシードがどれだけ危険な物か分かっているのか！」
「こちらにも集める理由があるからな危険でも譲れんな。」
「何だと！！」
「ユーノ君、ちょっと落ち着こう。」

興奮気味のユーノを落ち着かせるなのは。

「フェイトちゃん・・・やっぱり・・・。」
「ジュエルシードは渡せないよ。」
「そう・・・じゃあ、ジュエルシードを賭けて戦うんだね・・・。」
「なのは・・・ジュエルシードを戦わずに渡して。」
「えっ！？」

フェイトの発言に驚く、なのは。

「なのはと私じゃ実力の差がありすぎる・・・無駄に傷付けたくないんだ。」

「何を言っているんだあの子は！？なのはは前よりも実力が上がってるんだ、そう簡単に負けるものか！」

ユーノは成長したなのはの実力ならフェイトに勝てると思っている。

「フェイトちゃん・・・いくら何でも私を嘗めすぎじゃないかな・・・。」

「本当の事を言っただけだよ。」

フェイトは、はっきりとそう言う。

「なら成長した私の力を見てみてよ！」

なのははレイジングハートを構える。

「ディ・・・あれフェイトちゃんは！？」

なのはは目の前にいたフェイトが急に居なくなった事に驚く。

「後ろだよ。」

「えっ！？」

なのはは直ぐに後ろに振り向く。

「かっ、彼女いつの間に！？」

「フェイト、すっごく早くなったねえ。」
「だが・・まだフェイトは本気じゃない。」
「何だって！？」

キルアの発言に驚くユーノ。

「そっ、そんな・・・私あんなに練習頑張ったのに・・・。」
「私だって日々成長しているんだ・・・キルアのおかげでね。」
「貴方は彼女に一体どんな訓練をつけたんだ！？」
「普通に修行しただけだ。」

キルアはユーノの質問にそう答える。

「普通にって・・・。」
「まあ普通って言っても師匠のレベルの桁が違うけどね。」

アルフがユーノに向かってそう言う。

「フェイトの飲み込みが早かっただけさ・・・。」
「いや、実際私がここまで強くなれたのはキルアのおかげだよ。」
「ふ・・そう言ってもらえると嬉しいな・・・。」

フェイトの言葉にキルアは軽く微笑む。

「私、フェイトちゃんとこんなに差が出来てたんだ・・・・。」

フェイトととの差に落ち込むなのは。

「まあ、キルアがフェイトの師匠何だから、仕方ない事だよ。」

落ち込むなのはに対してそう言うアルフ。
「貴方は一体何者だ！」
ユーノはキルアに対しそう問う。
「ただの旅の格闘家だ。」
キルアはそう答える。
「あの子の成長率はただの旅の格闘家が師についただけじゃ説明がつかない！」
「本当に俺はただの旅の格闘家さ・・・。」
ユーノにあくまでただの旅の格闘家と言うキルア。
「フェイトちゃん・・・今回は私の負けだね。」
「なのは！？」
なのはが自ら敗北を認めた事に驚くユーノ。
「今回は私の負け・・・でも次は負けないよ！私、もっともっと強くなる！」
なのははフェイトに対してそう言った。。
「強くなろうとするのは良い事だと思うよ・・・なのは、ジュエルシードを。」
「負けちゃったし渡さなきゃね・・・。」

「なのは！？」
「ごめんねユーノ君・・・でもこれは決めてた事だから。」そう言ってなのははフェイトにジュエルシードを渡そうとするが・・・。
「ひゃっほーい！原作通りの場所になのはとフェイトがいるぜ！・・・原作にゃいねー奴もいるぞ？転生者か？」
転生者が現れた。
「転生者！？」
「なに？なに？転生者の事しってんの？じゃ、やっぱそこの奴転生者？」
キルアを指差しそう言う転生者。
「俺は転生者ではない。」
「じゃあ何なんだよおめぇ・・・でも、まっ、俺のなのはとフェイトと一緒にいるから死にな。」
急にキルアに向かって魔法を放とうとする転生者・・・キルアは軽く気絶させて終わらせるか・・・と考えるが。
「キルア、私に戦わせて。」
フェイトがキルアにそう言った。
「フェイト？」
「私、自分の力が転生者相手に通じるか確かめたいの。」
「・・・そうか、やってみると良いフェイト。」
「うん！」

「おいおいフェイトちゃん君、俺に勝てる気でいるの？俺、原作キャラに絶対負けない強さよ？」

転生者はフェイトに向かいそう言った。

「原作キャラとよく分かんないけど・・・私を嘗めないでね？」

「嘗めてんのはそっ・・」

ヒュッ！バキッ！

フェイトは転生者に素早い蹴りを放った。

「うぎゃあ！？いてぇ！？魔法障壁軽く破りやがっただと・・・こんな強さ聞いてねーぞ！！？」

フェイトの強さに慌てる転生者。

「・・・簡単に勝てちゃうかも・・・駄目だ油断しちゃ戦いは何が起こるか分からないんだから。」

フェイトは油断する事なく転生者と戦う

「くっ、くそぉ！くらえ！俺のスーパーウルトラゴージャスな魔法を！！」

転生者はＳＳＳランクの魔法を放った・・・だが。

「私の新技いくよ！ボルテックジャベリン！」

フェイトは雷の槍を気で作り出し転生者に投げつけた。

「こっ、こんな技フェイトが使えるなんてしらねーぞ！？」
驚く転生者・・・そして技が当たった。
カッ！バリッ！バババッ！ピシャアッ！
「うぎゃぐぼげぇぇえええ！！？」
転生者はフェイトにあっさり倒された。
「手加減したから死んでないよね？」
「ああ・・ちゃんと生きてるな。」
「よっ、良かった・・・。」
死んでなくて良かったと安心するフェイト。
さすがにあれな転生者と言えど殺すのは不味いと言う事だろう。
「あれぐらいの相手では今のフェイトの相手にはならんな・・。」
「えへへ・・ありがとうキルア。」
自分を評価してくれたキルアにお礼を言うフェイト。
「思った事を言っただけ何だがな・・。」
お礼を言われる事だろうか？と考えるキルア。
「キルア、帰ろっか。」
「フェイト！？あの子からジュエルシードを渡してもらわないでいいのかい！？」

「うん、今回は転生者が突然横に入って来たしね・・・それになのはとはまた会うことになるよ。」

フェイトはまた会うことになるから今回はいいとアルフに言う。

「フェイトがそう言うなら仕方ないねえ・・・。」

「ふ・・では帰るとするか。」

キルア達はこの場から去って行った。

「・・・行ったね彼等。」

「私、強くならなきゃ・・・。」

強くなると言う思いをなのはは胸に強く秘めるのだった・・・。

金髪の魔法少女と白き魔法少女　つきすぎた実力の差（後書き）

作者「転生者が見事にフェイトに破れました！」
フェイト「新技で決める事が出来たよ！」
キルア「技、実戦でちゃんと出来てたなフェイトさすがだ。」
フェイト「えへへ。」

アルフ「ねえ作者、アタシ全然戦ってないねえ・・・。」
作者「そのうち戦闘描写があるよ・・・では皆さんそろそろ。。」

フェイト「読者の皆様、今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」
アルフ「次回もちゃんと読んでおくれよ！」
キルア「これからもこの小説をよろしく頼む。」
作者「では読者の皆様また次回で！」

気になる格闘家の悲しい目（前書き）

今回はキルアの出番がすくないです。

気になる格闘家の悲しい目

「ねえ、キルア・・・時々悲そうな目をしてない？」
「いや・・・別にしていない・・・それよりも今日は一人で修行に出かける・・・御飯の用意はしておいたから暖めて食べてくれ。」
そう言ってキルアは外に出かけた。
「フェイト？何でいきなりあんな事をキルアに聞いたんだい？」
「うん・・・キルア時々凄く悲しい目をするんだ・・・本当に悲しそうな目を・・・。」
フェイトは暗い表情でそう言った。
「何か過去にあったのかねえ・・・あっ！？キルアいつも持ち歩いてる袋を持って行ってないね。」
「あっ、本当だ。」
アルフはキルアの荷物袋を見て閃いた。
「中を見ちゃおうよフェイト、過去の事とか分かるんじゃないかい？」
「駄目だよ！そんな事をしちゃ！見られたくないものだってあるかもしれないし・・・。」
フェイトは怒り気味にアルフにそう言った。
「で、でも気になるじゃないか・・・フェイトだって本当は気になるんじゃないかい？」

「き、気になるけど・・・。」
「恥ずかしい物何て入っちゃいないよ、だから見ちゃおうよフェイト。」
「で、でもぉ・・・。」

フェイトの自分の中の見たいと言う悪魔と見たら駄目と言う天使が戦っていた・・・しかしフェイトが悩んでいるうちに・・・。

「もう開けちゃったよ。」
「ア、アルフ！？」
「何が入ってんだろうねえ・・・あっ、何か変わった石が出てきたね、でもこれはキルアの過去は関係ないねえ・・・。」
「アルフ止めようよ・・・。」
「もう開けちゃったしアタシは最後まで突っ走る！」

力を込めてアルフはそんな事を言うがやってる事は結構あれな事である。

「えーと次は・・・薬袋かこれも関係ないね。」
「アルフ～。」

フェイトはおろおろしてアルフを見る。

「フェイトもチラチラ目をやってるじゃないか・・・ここまで来たら一緒に見ようよ、好きな男の過去を知るのはアドバンテージだと思うよ。」

けどやっている行動はディスアドバンテージである。

「・・・キルアには内緒だよ？」

「分かってるって。」

フェイトの心の中の天使と悪魔の戦いは悪魔の勝ちのようだった。

「次は・・・おっ、何だろうねこのケース？」

「開けてみよう。」

「そうだね・・・手紙とペンダントが入ってるよ。」

「手紙を読むのは、まずいよね・・・。」

誰かがキルアに贈った手紙を読むのはさすがにまずいと思うフェイト。

「アタシは読む！」

意気込むアルフ、人の手紙を読むのに気合いを入れるのはおかしいと思う。

「えーと何々・・・。」

『キルアさんへ・・・長い修行の旅に出ると聞きました。
私は忙しく見送る事が出来ないのでこの手紙とペンダントを贈ります』

「これ女からの贈りものだ！？」

「こ、恋人なのかな・・・？」

「続き読むよ！」

アルフは手紙の続きを読む。

『キルアさん、このペンダントは身に着けると安らぐ闇の力を込め

ておきました。
疲れた時に身に着けてください。
でもキルアさんが身に着ける事は少なそうですね。
キルアさんは強いですから。
キルアさん修行頑張ってください！
そしてできればたまに帰って来てくださいね私達の世界へ。
皆もきっと喜びます！

アルマより 』

「こりゃ恋人って言うより友達だね・・・。」
「何かこの人に悪い事をしちゃったよね・・・勝手にキルアに贈った手紙読んじゃったし・・・。」
「ちゃんと手紙はケースに戻さなきゃね・・・。」

アルフは手紙をケースにちゃんと戻した。

「キルアの過去にに繋がる物は、まだ出ないねえ・・・。」
「もしかしてキルアの荷物には入ってないんじゃないかな？キルアの過去に繋がる物。」
「そうなのかねえ・・・んっ？これは魔導書初級編？」
「あっ、それキルアが私に魔法を教える時に使った奴だ。」
「中級編と上級編ってのもあるね・・・でも上級編は封印が、かかってるみたいだ。」
「上級って言うぐらいだからとっても凄い魔法何だろうね。」
「だろうねえ・・・んっ？未完編って言うのも出てきたよ・・・封印の強さが異常だね・・・。」
「危険な魔法が書いてあるのかな？」
「でも未完って書いてあるけどね。」
「未完・・・気になるよね。」

魔導書未完編に興味を示すフェイト・・・人間見たらいけないものに興味を示すものである。

「まあ、今はこれよりもキルアの過去に繋がる物だよ。」

「そうだね、アルフ。」

フェイト達は再びキルアの過去に繋がる物を探し始める。

「ん～と・・・またケースだ。」

「また手紙と何かが入ってるのかな？」

「開けよう。」

ケースを開けるアルフ、中には手紙と茶色い籠手（ストリートファイターのリュウが着けてる物と見た目同じ）が入っていた。

「手紙を読むよ。」

「ごめんなさい手紙を書いた人とキルア・・・。」

アルフは手紙を読む。

『キルア、長い修行の旅に出るんだってな俺はちっとな修行が忙しくて見送りに行けねーんだ。

悪いな俺とお前は兄弟みたいなものなのにな。』

「キルアの兄弟みたいな人だって。」

「何か感じのいい人みたいだね。」

『お前もう籠手持ってるけどよ予備として贈っとくぜ、それにしても長い修行の旅か・・・お前と手合わせする機会も結構なくなっち

まうんだな。
まっ、永久に会えねーわけじゃないかキルア修行頑張れよ！スゲー強くなれよ！俺もスゲー強くなるからな！
俺達の世界にたまには帰って来い！絶対だ！

剣舞より　　『

「何か勢いのある手紙だったね。」
「うん、そうだね字に凄い力込もってるし。」
「この手紙もちゃんとケースに戻さないとね。」

アルフは手紙をケースに戻した。

「にしてもキルアの過去に繋がる物まだ出ないねえ・・・。」
「やっぱりないのかな？」
「いや、まだアタシは諦めないよ。」

そう言ってアルフはキルアの荷物を再び探る。

「おっ？これは・・・絶対関係ないね・・・。」

アルフが取り出した物は『天才科学者発明セット』と言う物だった。

「これ中身何が入ってるんだろ？」
「開けよう！・・・あれ？開かない？」
「あっ、ここパスワード入力って書いてあるよ。」
「じゃあこれを開けるのは諦めよう。」

アルフは開けるのを簡単に諦めた。

「さあ次探そう。」
「もう止めた方が・・・」
「何言ってんだい、フェイト！ここまできたらとことんやるよ！」
「うう・・分かったよ。」
「次は何が出るかな・・・これは布切れ？」
「キルアは旅の格闘家何だから野宿の時に自分にかける物じゃないかな？」
「多分そうだろうね、他には何か・・・これはマフラーだ。」
「字が縫い込まれてるね。」

その縫い込まれてる字は。

「『お兄ちゃん大好き　桃花』。」
「キルア、妹が居るんだね。」
「一生懸命さがにじみでる気持ちの込もったマフラーだね。」
「うん、このマフラーとっても暖かそう。」
「これで荷物は最後みたいだね。」
「アルフ・・・キルアが帰って来たら謝ろう？」
「うん・・・そうしようかフェイト。」

二人はキルアが帰ってくるのを待った・・・キルアに謝る為に。

そしてキルアが帰って来た。

「ただいま・・・フェイトにアルフどうした？」

キルアは二人の様子が変な事が気になった。

「ごめんなさい！」
「ごめんよー！」

二人は泣きながらキルアに謝った。

「一体どうしたんだ？」

「キルアの袋の中の荷物勝手に見ちゃったの・・・・。」

「どうしてだ？」

「キルアが時々悲しそうな目をして・・・過去に何かあったのかなって気になって・・・ごめんなさーい！」

「最初に見ようって言ったのはアタシ何だ・・・だから叱るならアタシだけにしておくれよ！」

「別に俺は怒っていないぞ？・・・過去に囚われてる俺が悪いんだ気にするな・・・だが他人の荷物は勝手に見てはいかんぞ。」

「過去に囚われてる・・・？じゃあやっぱりキルアは過去に・・・」

「すまない・・・それは聞かないでくれ。」

「うん・・・キルアが話したくないなら。」

「ねえキルア、アルマと剣舞ってどんな人だい？。」

アルフは手紙の二人が気になってキルアに聞いてみる。

「ああ・・二人の事か、アルマは一言で言えば心の優しい分け隔てなく人を見る女性だな・・・剣舞は俺の兄弟みたいなもので強さを求め日々鍛練を怠らない奴だ、どちらも俺の大切な仲間だ。」

「大切な仲間・・・。」

フェイトはキルアのその言葉を聞きキルアが二人を大事に思ってるんだなと思った。

「そう言えばキルア妹がいるんじゃないかい？その子はどんな子だい？」

アルフはマフラーの事からキルアに妹が居ると思いそう聞いた。

「ああ・・妹は優しく兄思いの良い子だ・・・。」

「良い子何だねえ。」

「キルアの仲間や妹会ってみたいな。」

「会ったら仲良くできると思うぞ・・・良い人達だからな。」

「今日はキルアの仲間の人達の事にふれる事ができたね。」

「そうだねフェイト。」

「二人とも俺だから怒らなかったが人の物を勝手に見ては駄目だぞ。」

「は、反省してます・・・。」

「アタシも、もうしないよ・・・。」

「ふ・・それなら良い。」

フェイトとアルフはキルアの荷物を勝手に見たがキルアの心が広かった為に怒られなかった。

人の荷物は勝手に見てはいけないと言う事をフェイトとアルフは心に深く刻むのだった・・・。

気になる格闘家の悲しい目（後書き）

作者「やっと小説書けたよ・・・携帯使えない時が多くて大変だ・・・。」
フェイト「今回キルア主人公なのに出番が少ないよね。」
アルフ「今回はアタシとフェイトがメインだったねえ。」
キルア「アルマに剣舞・・・元気にしてるだろうか。」
作者「してるでしょ・・・あの二人強いし・・・そろそろ皆さんよろしくお願いします！。」

フェイト「読者の皆様今回もこの小説を読んでくれてありがとうございます！」
アルフ「今回はキルアの出番が少かったけど次回は普通に多目だよ！」
キルア「次回もこの小説をよろしく頼む。」
作者「この小説をこれからもよろしくお願いします。」

接触、閃光の騎士！（前書き）

謎の存在に出た二人が登場！

接触、閃光の騎士！

キルア達は現在とある公園に来ていた。

この場所にジュエルシードの反応があったからである・・・そしてジュエルシードは現在木の中に入り魔物となっていた。

「グォォオオ！！」

「木の魔物か・・・。」

「あの木の中にジュエルシードがあるね。」

「倒せば出てくるよ。」

「分かった、じゃあ倒す。」

ビッ、バキィッ！

キルアは一瞬で木の魔物を倒した。

すると倒された木の中からジュエルシードが出てきた。

「フェイト、封印を。」

「うん分かったよキルア。」

フェイトはバルディッシュを起動させジュエルシードを封印した。

「キルアが居るとあっさりおわるねえ・・・。」

「そうだね、アルフ。」

「来るな・・・。」

キルアはまた今回もなのは達が来ると考えていた。

そして考え通りなのは達はやって来た。

「くそっ、また先を越されたか！」

「フェイトちゃん・・・。」

「なのは・・・。」

二人の少女はお互いに目を合わせデバイスを構える。

「フェイトちゃん・・・私強くなったよ。」

「なのは・・・うん確かにね、でも私だって強くなってるよ。」

「なのはは死に物狂いで訓練をしたんだ！君に負けるものか！」

「・・・・・。」

キルアはなのはをじっと見ていた。

「おい、フェレット死に物狂いとはあくまで合間に休みを加えてか？」

「いや、休みなしで・・・僕は少し休んだ方が良いと言ったけどこれぐらいしなきゃフェイトちゃんには勝てないってなのはが言ったから・・・でもなのははあの通り気合い充分疲れなんて感じさせないよ！」

「指導者失格だな・・・なのはは確実にフェイトに負ける・・・普通の奴が見ればとても疲れてるように見えないだろうが・・・俺には分かるなのはは体に尋常じゃない疲労が溜まっている・・・あのまま戦わせるのは危険だ。」

「えっ！？何だって！？」

「最悪体に障害が残るかもしれん・・・。」

「と、止めないと！？」

しかしフェイトとなのはは既にぶつかり合おうとしていた。

「（止める！）」

ガッ。

キルアはフェイトとなのはがぶつかり合うのは止めた。

「キルア、どうして邪魔するの！」

「キルアさん邪魔しないでください！」

「なのは！何故そんな体で戦おうとした下手をしたら体に障害が残る所たったぞ！」

キルアは真剣になのはを叱る。

「わ、私はこの通り元気ですよ・・・。」

「俺の目は誤魔化せん！なのはお前の体には尋常じゃない疲労が溜まっている！」

「それでキルアは戦いを止めたんだ・・・。」

「フェイト、今回の戦いは・・・。」

「うん・・・無しにするよ。」

「キルアさんは何でそこまでして戦いを止めるんですか・・・私はいくら頑張ってもフェイトちゃんに勝てない・・・つまり弱いからですか？」

「キルアは貴女の事を心配して！」

「なのは・・・お前は家族の事を考えたか？」

「家族・・・の事？」

「お前が無理をした結果、体に障害を残し苦しむお前の姿を見る家族の姿を！」

「あっ・・・！？」

「フェイトに圧倒的に差をつけられて悔しかったんだろう・・・だが無理をしてまで訓練をし体を壊しかけてどうする・・・家族が悲しむじゃないか・・・。」
「わ、私・・・私は・・・。」
なのは自分のした事を悔いて涙を流しかけた時・・
「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。君達、ジュエルシードの件に関わってるね事情を聞かせてもらおうか。」
空気を読まないでクロノとか言う奴が現れた。
そしてそのクロノは・・・
ヒュン！バキャッ！
突然ぶっ飛ばされた。
「がっ！？」
「一人の少女が己の行動を悔い家族の為に涙を流そうとする時にいきなり割って入るとは・・・なんたる愚。」
「左様でございますね閃光の騎士様。」
「きっ、君達は何者だ！？」
「貴様ごときに名乗る必要はないＫＹ。」
「閃華ＫＹとは何だ？」
「黒くて弱いと言う意味の言葉でございます。」
「空気読めないと言う意味だろ！」
自分で言ってしまったクロノ。

「何？空気を読めないと言う意味だったのか。」
「そう言えばそんなもう一つの意味もありました。」
「二つの意味がある言葉だったのか。」
「明らかにそこの君がつけ加えただろ！」

クロノは閃華を指差しそう言う。

「言いがかりをつけるな。」
「閃華に自分の無知を擦り付けるとは・・・ますます愚だな。」

閃光の騎士は閃華の事を信じきっていた・・・黒くて弱いは閃華がつけ加えたものなのだが・・・。

閃光の騎士達が話していると別の誰かがやって来た。

「見つけたぜ格闘家！」
「貴様は・・・最初に会った転生者。」

キルアはちゃんと彼の事を覚えていた様だ。

「ちゃんと覚えてたみてえだな！」
「一応な・・・。」
「あいっかわらずムカツク野郎だな・・・ん？何だテッメエ？」

バカな転生者は閃光の騎士を見てそう言った。

「貴様ぁ・・・今、閃光の騎士様に向かっててめえとか言ったな・・・。」
「だから何？お嬢ちゃん？」

「貴様を殺す。」

閃華はレイピアでバカな転生者を切りつける・・・バカな転生者が追いきれないスピードで。

「イッテエ！？いつ切られたんだ！？」

「楽には死なさんぞ・・・。」

「閃華やめなさい私は彼の言葉は気にしていない・・・それにこれ以上やるとあの格闘家・・・キルアと言う者が彼を助けに入るだろう。」

「こんなどうでもよさそうな奴を？」

「それでも命ではあるからね。」

「転生者この場からとっとと離れろ・・・死にたくないならな。」

「な、何かヤバソーだから逃げるぜ！」

転生者はさっさとこの場を離れて行った。

「さて・・・旅の格闘家キルア、君に私は勝負を挑む。」

「キルアに勝負を挑むだってアイツ負けにいく気にかい？」

「貴様！閃光の騎士様に向かって！」

「閃華、落ち着きなさい。」

「はい。」

閃華は閃光の騎士に言われるとすぐに大人しくなった。

「で・・・戦いは受けてくれるかね？」

「周りを巻き込まんならな。」

「分かった閃華、私と彼を結界の中に入れてくれ。」

「はい分かりました閃光の騎士様。」

閃華は閃光の騎士に言われ結界をはる。

「きっ、キルア！？」

「アンタ！キルアを結界に閉じ込めてどうする気だい！！」

「閃光の騎士様の戦いの舞台を整えただけだ。

結界でどうこうしようなどとしていない。」

「本当だろうね・・・それにしてもこの結界、中が見えない！」

「キルア、大丈夫かな・・・。」

「キルアさん・・・。」

「それにしても何て高度な結界何だ・・・。」

ユーノは閃華の結界を見てそう呟いた。

「僕を無視して事が進んでるな・・・一体何なんだ！」

クロノは急に現れた存在のせいで自分の仕事ができなくてイラついていた。

結界の中・・・

「ここは頑丈だ思う存分戦ってくれたまえ。」

「分かった・・・では行くぞ！」

キルアは閃光の騎士に向かって行く！そして攻撃を繰り出すが。

「その程度では私には勝てんよ！光輝神鳴斬！」

ヒュパッ！ヒュヒュヒュヒュ　ヒュッ！ザン！！

「くっ。」

キルアは閃光の騎士の攻撃をガードした。

「見事な防御だ。」

「なるほど貴様の実力は分かった・・・三割の力を使って倒す。」

「三割の力で私を倒すか・・・ハッタリではないね。」

「それが分かる貴様はやはり強いな。」

「相手の力を理解するのも実力のうちだからね。」

「では行くぞ！黒龍拳！」

ドガッ！ガッガッガッガッガッ！！

「ぐぁぁあ！！」

閃光の騎士はキルアの技を受け倒れた。

「俺の勝ちだな。」

「ああ・・・私の負けだ・・・私もまだ鍛練が足りないね。」

キルア対閃光の騎士の戦いはキルアの勝利でかたがついたのだった。

そして結界の外では・・・。

「閃光の騎士様が負けた！？結界解除！」

閃華の意思により結界が解除され中からキルアと閃光の騎士が出てきた。

「キルア！無事だったんだね。」

「アタシはキルアが勝つって信じてたよ！」
「キルアさん私もう家族に心配をかける様な無茶はしません・・・考えてみて分かりましたから・・・。」
「そうか・・それでいいんだ・・・なのは。」
キルア達が会話している中で閃光の騎士達が話しかけて来た。
「私達は帰らせてもらうとしよう・・・キルア、私が強くなったらもう一度戦おう。」
「閃光の騎士様は次は負けない！」
「では・・・さらば！」
閃光の騎士達は光に包まれ消えて行った。
「奴等は一体何者だったんだ・・・？」
「普通の人達でない事だけは確かだよね。」
「でもキルアの相手じゃなかったね。」
キルア達が閃光の騎士達を何者かと考えていると忘れられてそうなクロノが話しかけてきた。
「おい、君達ジュエルシードに関わってる参考人として事情を聞きたいんだが。」
「時空管理局とか言ってた奴だったな・・・大方警察の様なものだろうな。」
「分かってるなら話が早い事情を・・・」
「フェイトにアルフは先に帰っていてくれ俺はなのはと話があるから・・・すぐには帰れないかもしれないからジュエルシード探索を頼む。」
「うん分かったよ、残りのジュエルシードもちゃんと集めるよ今の

私なら大丈夫だよ。」
「キルア、帰ったらちゃんとご飯を作りなよ！」
「分かった。」

フェイトとアルフはキルアと話すと先に帰って行った。

「ちょ、ちょっと待て！」
「事情聴取なら一応俺が受けてやる・・・フェイトとアルフを追うというなら俺は貴様を倒すぞ？」

キルアは凄まじい威圧をクロノに与える。

「わ、分かった・・・。」
「私も行くんですか？」
「ああ、そうしてくれると助かるよ。」

突如モニターが現れた。

『クロノ、二人逃がしちゃったみたいね。』
「ですがその二人の仲間が事情聴取に応じる様です。」
『ええ、じゃあクロノ早速二人をアースラに連れて来て。』
「では連いてきてくれ。」
「分かった。」
「はい、分かりました。」

キルアとなのはは共にクロノに連れられアースラに向かうのだった・・・。

接触、閃光の騎士！（後書き）

作者「読者の皆様・・・この小説もクライマックスが近くなりました・・・あくまでリリカルなのは無印のですが・・・A．s編に普通に続けようと思います。
読者の皆様！これからもこの小説をよろしくお願いいたします！」

全て集まるジュエルシード（前書き）

今回はページが多めです。あと後書きにおまけ小説をちょっとだけ書きます。

全て集まるジュエルシード

キルアとなのはは現在クロノに連れられアースラに来ていた。
先頭を歩いていたクロノが振り返りなのはの方を見た。
「バリアジャケットとデバイスはもう解除してもいいよ。」
「あっ、はい。」
なのははバリアジャケットを解除しレイジングハートを待機状態にした。
クロノはユーノの方へ視線を向ける。
「君も元の姿に戻ったらどうだい？」
「あっ、忘れていました。そうですね。」
ユーノは光に包まれその中でフェレットの姿から人間の姿へと変わっていく。
光が収まるとそこに居たのは、なのはとそう対して年の変わらない少年だった。
「ふぅ・・・なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな？」
「えっ？・・・ええーー！？ユーノ君って人間だったの！？」
なのははユーノが人間であった事に驚くがキルアは無反応だった。
「あれ？なのはと最初に会ったのはこの姿じゃなかったっけ？」
「フェレットの姿だったよ！？」

「あ・・・。」

ユーノは思い返していた・・・そういえば確かに最初に会った時はフェレットの姿で、なのはにはこの姿を見せていなかった事に気づいた。

「この姿を見せるの今回が始めてだったみたいだね。」

「お、驚いたよ・・・ユーノ君が人間だったなんて・・・。」

「君達・・・話すのは後にして連いて来てくれないかい？」

クロノがユーノとなのはにそう言う、なのはとユーノはすみませんと言いクロノに連いていく。

「艦長連れて来ました。」

キルア達は艦長の部屋に到着した。部屋の中に入るとキルアは顔をしかめた・・・部屋の中は盆栽やお茶の道具に畳や獅子お脅しが置かれていた・・・キルアが顔をしかめた理由は和の文化の物なのに何か和がとれていない所だった。

「（ただ和の物を置けばいいと言うものでは無いだろう・・・。）」

「とりあえず座って楽にしてくださいね。」

笑顔でリンディにそう言われなのは達は畳に座る。

「私が時空管理局提督『アースラ』艦長のリンディ・ハラオウンです。」

この後互いに自己紹介し、ユーノ達は今までの経緯を話した。

「まあ、あのロストロギアジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね。」

話を聞きおえたリンディがユーノにそう言う。

「・・・はい、だから僕が回収しようと・・・・。」

「立派だわ。」

「だがそれと同時に無謀でもある。」

「うっ・・・・。」

クロノの言葉に俯くユーノ。

「あの『ロストロギア』って何ですか？」

なのはがリンディに聞いた。

なのははリンディから聞いた。次元空間の中には幾つもの世界が存在する。その中には他の世界よりも進化しすぎた世界がある。その世界を滅ぼした危険な技術の遺産。それらを総称して『ロストロギア』と呼ぶ。使い方によっては世界どころか次元空間を滅ぼす程の力になると。

話を聞いた、なのはは自分がどれだけ危険なものに関わっていたか理解した。

「これからはロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます。」

「えっ！？」

リンディの言葉になのはとユーノは戸惑う。

「君達は今回の事を忘れてそれぞれ自分達の世界に戻って元のように暮らすといい。」

「でっ、でも・・・。」

「次元干渉レベルの事件にこれ以上民間人を巻き込むわけには行かない。」

戸惑うなのは達にさらにクロノは、そう言った。

「まぁ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。一晩たってからまた改めて話をしましょう。」

リンディのその言葉にキルアが反応した。

「何故考える時間を与えるんだ？本当に関わらせたくないなら考える時間など与えなくともいいだろう？」

キルアのその言葉になのは達を送ろうとしていたクロノも反応した。

「そう言えば確かにそうだ・・・艦長、何故考える時間を与えるんですか？」

「そっ、それは・・・。」

クロノにも考える時間を与える事について聞かれリンディは少し動揺する。

「大方、時空管理局は人手不足だから協力を申し出てもらおう・・・

そう考えていたんじゃないか？」
「本当ですか！？艦長！？」
なのは達を今回の件から本当に手を引かせようと考えていたクロノは驚いた。
「ええ・・・そうよ。」
「立場上、頼めないのかもしれんがやり方がくどいな・・・。」
キルアはリンディのやり方が気にいらなかった。自ら頭を下げ頼まず相手から申し出てくるのを待つと言うやり方に・・・協力してほしいなら頭を下げて頼むこれは当然の事なのだ・・・危険な事なら尚更の事だ。
「あ・・あの私・・・」
なのはが何か言おうとするがキルアが・・・
「すまない、なのは・・・俺から言わせてもらっても構わないか？」
「あっ、はいどうぞ。」
キルアの真剣な顔でリンディを方を向き言葉を発した。
「ジュエルシードは俺が事が終わったら全て破壊する。」
キルアの発言にリンディ達は驚きの表情になる。
「ロストロギアを破壊！？そんな事が出来る筈がない！！」
「事が終わったらと言う事は何かに使用するのですか？」

クロノは驚き、リンディはキルアがジュエルシードを使用すると言う事に注意を向ける。

「使用すると言っても邪悪な事ではない・・・・。」
「邪悪な事では無いと言う確証は？」
「邪悪では無いのは確かだが話せんな・・・・。」

キルアは何に使用するかは話さなかった・・・プレシアの心の部分に触れてしまうからだ。

「クロノ・・・・。」
「はい。」

リンディはクロノに視線を向け、クロノがその意味を理解するとクロノはキルアにバインドをかけた。

「キルアさん！？」
「ジュエルシードを使用すると言う人物は野放しにはしておけないわ。」
「（使用するのは俺では無いがな・・・・。）」
「キルアさんは邪悪な事に使わないって言ってます！それに使用するのはキルアさんじゃないと思います。」
「あの金髪の子と使い魔にジュエルシードの回収を頼んだ人物か？」

クロノは何となく推測しキルアにそう言った・・・だがキルアは無言だった。

「黙秘か・・・・。」
「クロノ、彼を連れて行きなさい。」
「はい。」

クロノはキルアを連れて行こうとするが・・・

「このぐらいで俺を捕らえたと思っているのか？」

キルアは軽く力を入れバインドを破壊した。

クロノは驚愕の表情になる。

「魔力も持たない身でバインドを破壊！？・・・あの時の威圧を感じた時普通の奴じゃないとは思ったが・・・化け物か君は！？」

「別にこれぐらいの捕縛を破ったぐらいで大袈裟な反応だな・・・。」

「あっ、貴方は抵抗する気ですか！？」

リンディは焦った表情でキルアにそう言う・・・リンディのその言葉に対してキルアは・・・。

「別に攻撃は仕掛けない・・・だが連行される気はない。」

「くっ、ジュエルシードを利用使用とする者と繋がっている奴を捕らえておけないのか・・・。」

「悪用はしないと言っているんだがな・・・なのは、ちょっといいか？」

「何ですか？」

「ジュエルシードを全て渡して欲しい・・・何に使うのかは話せんが決して悪用はしない。」

キルアは真っ直ぐな目をしてなのはに言う・・・キルアの言葉に対してなのはは・・・。

「ユーノ君・・・ジュエルシード、キルアさんに渡していいかな？」

「なのは！？」
「キルアさんは悪用しないって言っているし・・・それに封印して保管するよりも破壊してしまう方が絶対にいいと思うんだ・・・絶対に悪用されないためには。」
「・・・・・分かったよこの人の力は僕も目にしてきた・・・この人なら本当に破壊できそうだしね。」
「君達！何を勝手に決めてるんだ！」
「封印して保管すればジュエルシードと言う力はこの世に残る・・・そしてその力がある限りいつかは悪用しようとするものが現れるかもしれない・・・違うか？」
「ぐっ・・・だが管理局の管理はそんなに甘くはない！」
「だがその管理局の中に力を欲する者がいたとしたら？」
「管理局にそんな人間は絶対いない！！」
クロノはキルアの言葉に激怒する・・・だがキルアはまだ言葉を続ける。
「絶対か・・・何故そう言いきれる？」
「管理局の者は皆、次元世界に生きる人々の生命と財産を守って平和な日常を維持しつづける・・・皆その為に戦っている！だから管理局の中に力を求め道を踏み外す様な者はいない！！」
クロノは管理局の中に道を踏み外すものはいないそうはっきり断言するが、キルアはまだ言葉を止めない。
「人々を守る心を持っていたとしても何かがきっかけでその心が変わってしまうかもしれない・・・そう考えた事はないのか？」
「管理局の者の心が変わるわけが・・・・。」
「ない・・・とは言い切れないな・・・人は簡単な事で変わってしまう。いい方向へも悪い方向へも・・・それぐらい分かるはずだ。」

「ぐっ・・・。」
「貴方に管理局の人達の何が分かるの！！」
クロノはキルアに言い負かされそうになるが、今度はリンディがキルアに対して怒りをぶつけてきた・・・しかし。
「管理局の人達の何が分かるか・・・確かに分からないな俺には・・・だが貴様らは分かっているのか人間の事が？」
「分かってるに決まって・・・。」
「では何故、管理局の者はその心が変わらないと言い切れる？自分達が特別な人間とでも思っているのか？」
キルアは鋭い眼差しをリンディに向けそう言葉にする。リンディはキルアの鋭い眼差しに身を縮ませる。
「別に私達は自分を特別な人間なんて思っていまんせん！人には変わらぬ心があると私は思っているだけです！」
リンディはキルアに対して力を込めてそう言葉にする・・・だがキルアは鋭い眼差しを止めない。
「確かに変わらぬ心も人にはあるだろう・・・だがそれが全て同じ心だとは限らん。」
「うっ・・・でも管理局の者は・・・」
「全員が次元世界の人々の生命と財産を守り平和を維持しつづける変わらぬ心を持っていると言いたいのか？・・・それが自分達を特別だと思っていると言っているんだ・・・何故全く同じだと言い切れる・・・違う人間だと言うのに。」
「ですが、この仕事は人々を守る仕事！守ろうと思わないものがやろうとするはずが・・・」

「無い・・・と言いたいのだろうが人を守る仕事でも守ろうと言う気持ちが無くともやる者はいる・・・給料がいい、待遇がいい、人はそんな理由で人を守る仕事につくこともある。」
「あっ・・・・くっ。」

キルアの言葉にリンディは言い返せなくなる。

「貴様達は確かに人々を守ろうとする心を持っているだろう・・・だが他の者も全員が同じ心だと思うんじゃない。」
「だがそれと君がジュエルシードを壊す話は別だ！」
「俺がジュエルシードを壊す理由・・・それは俺の世界のレベルの事がジュエルシードに関わっているかもしれないからだ。」
「君の世界のレベルだと？」
「俺の世界のレベルの事では次元崩壊するぐらいの力は俺の知っているあの人達は個人が普通に持っている。」
「なっ！？」
「そんな力を持つ人達がいる世界があったと言うの！？」
「でっ、デタラメだ！そんな力を持つ人間がいるわけがない！？」
「デタラメでは無いし実際にそんな力を持つ人間はいる・・・貴様達の目の前にだ。」
「あっ、貴方そんな力を！？」
「どうせハッタリだろう！」

キルアがそんな力を持っているのかと驚くリンディだがクロノはハッタリだと信じようとしない。

「ハッタリではない。」
「口で言われるだけで信じられるか！」
「では見せればいいのか？」
「できるものならな！」

キルアとクロノが言い合う中、アースラ艦内に緊急アラームがが鳴り響いた。

「一体何事だ！」

「とにかくブリッジへ！」

「何が起こったんでしょうかキルアさん？」

「とりあえずついて行けば分かるだろう。」

キルア達はクロノ達に連いて行きブリッジへ来た。

するとそこにあるモニターには荒れ狂う海上の上でジュエルシードを封印しようとするフェイトの姿が映っていた。

「あの数のジュエルシードを一気に封印！？無茶だわ！？」

「個人の出せる魔力量を越えていますね、間違いなく自滅します。」

クロノはそんな言葉を軽く口にする・・・だが。

「今のフェイトなら、あの数のジュエルシードを一気に封印する事はできない事ではないな。」

キルアは今のフェイトの実力が分かっていたのであれは無茶ではないと考えていた。

「そんなわけが・・・」

「あの少女がジュエルシードの封印に成功しました！？」

クロノがフェイトがあの数のジュエルシードを一気に封印できるのを否定しようとするとオペレーターがフェイトがジュエルシードの

封印に成功した事を伝える。

「何！？」

「なのは、ちょっといいか？」

「え？何ですかキル・・・。」

なのはが言葉を言いおえる前にキルアがなのはを抱える。

「すまない。」

「えっ！？・・・ええー！？」

急の事になのはは顔を赤らめ動揺した。キルアは、なのはを抱え空間転移する。

「なっ！？消えた！？」

海上・・・

「ふぅ・・・封印成功したねアルフ。」

「六個ものジュエルシードを一気に封印って・・・本当に成長したねぇ。」

ビッ！

フェイトとアルフが会話している所へ、なのはを抱え転移したキルアが現れる。

「きっ、キルア！？何でなのはを抱えてるの！？」

「これには理由があってな・・・なのは、レイジングハートを起動させバリアジャケットに着替えてくれ。」
「あっ、はい。」
キルアは抱えていたなのはを降ろす。なのははキルアに言われるままレイジングハートを起動させバリアジャケットに着替えた。
「なのは・・・今から言うことを聞いてくれ。」
「は、はい！」
キルアはなのはにある事を言う・・・・。
「えっ！？でもそれじゃあキルアさんが・・・。」
「別に構わない・・・なのは、ジュエルシードを。」
「はい・・・。」
なのはジュエルシードをキルア達に渡す。
「これで全てのジュエルシードが集まったんだ・・・母さんの所へ報告しに行かないと！」
フェイトはジュエルシードが全て集まった事を喜びプレシアに早く報告しようと意気込む。
「なのは、やるぞ・・・この後は言った通りに。」
「はい・・・。」
キルアは片手に気を溜め海に向かって放つ。

「よし、これで・・・フェイトにアルフ、プレシアの元へ行こう。」
「うん！」
「あいよ！」

キルア達は場を離れプレシア達の元へと向かった。そしてこの後なのははクロノによって保護されアースラへ。。

「君、大丈夫だったかい？・・・それにしてもあの男はとてつもないエネルギーを放ったな。」
「ジュエルシードを渡していたけどあの様子じゃ脅し取られたのでしょう。」
「確かに君は彼に渡すとか言っていたがあの様子からして思いなおした君を脅しジュエルシードを奪い取ったのだろうな・・・酷い男だ。」
「酷い目にあったわね・・・あの男、こんな子を脅す何てやっぱり悪人かしら。」
「・・・・わないで。」
「何と言ったんだい？」

なのはが呟いた言葉が聞こえなかったクロノは、なのはに何と言ったかを聞く。

「キルアさんを悪く言わないで！あの人は本当にジュエルシードを破壊するつもりだよ！あの気弾って言うのを海に向かって放ったのは私が脅された様に見せる為だよ！」
「何故彼はそんな事を？」
「貴方達がキルアさんがジュエルシードを使った後には破壊するって事に賛成しなかったから、そんな状態で私がキルアさんにジュエルシードを素直に渡せば私が罪に問われるからだよ！！」

なのはは涙を流しながらリンディ達にそう言葉を口にした。
「彼、この子の為に自分の罪を大きくするきだったの！？」
「キルアさんが本当に悪い人なら私を倒してでもジュエルシードを奪っていったはず・・・それにキルアさんは初めて会った時に私を助けてくれた・・・そんな人が悪い人の筈がない！！」
「なのは・・・。」

ユーノは泣いてるなのはを見て思い返す・・・確かにキルアは、なのはを助けたなのはを殺そうとする奴から・・・それにキルアはフェイトと戦い負傷したなのはに回復薬を渡したりしていた・・・そしてキルアは疲れを溜め込んでも元気なふりをしていたなのはに気づき止めてくれた・・・思えば彼は悪人と呼べる要素はなかったと・・・。

「なのは・・・彼は確かに悪人なんかじゃないね。」
「ユーノ君・・・。」
「では彼はあの事についても嘘をついていないと言うの・・・！？」
「艦長？」
「彼の世界のレベルの話・・・彼が魔力を持たないのに空間転移した事からも事実の可能性が高いのかもしれない・・・だとしたら今回の件は私達では対応仕切れないかも・・・。」
「次元崩壊を起こすぐらいの力を普通に持つ者達が対処する事か・・・。」

クロノは想像してみるがレベルの話が飛びすぎていて全く想像できなかった・・・ただ分かる事はとんでもなくヤバいと言う事だけ。

「艦長・・・僕は彼が言った事を少し考えてみたんです。」
「何かしらクロノ。」
「彼は管理局の全員が次元世界の人達が守ろうとする心を持っているわけではないと言っていました・・・しかし彼は一人も持っていないや多くの者が持っていないとは言っていませんでした。」
「！？・・・そう言えば確かに。」

キルアは全員がは否定したが多くの者がは否定していなかった。

「全員が全く同じ心を持つわけがないと言うのは同じ人間などいないから当たり前の事で平和を守る心も色々あるのではないかと僕は思いました。」
「私達は管理局の者である事で少し自分達を特別と思っていたかもしれないわね・・・。」

人は管理をする役職につくと無意識の内に自分を特別だと思ってしまうのもしれない・・・リンディはそう思った。

「僕の中には確かにある・・・変わらない次元世界の人々の平和を守ると言う心が・・・。」

クロノは自分の中にある心を確かめた・・・次元世界の人々の平和を守る心を・・・。

もうすぐ大きな異変が起こる・・・ジュエルシードが全て集まったのだから・・・本来は、無い筈のジュエルシードを加えて・・・。

全て集まるジュエルシード（後書き）

ここはテキトーナ研究所・・・決して適当な研究所ではない。
テキトーナ博士が住み様々な凄いが何か足りない発明を作っている。
そしてそんなテキトーナ研究所に一人の男がやって来る。
「テキトーナ博士ー！呼ばれたんで来ましたよー！」
テキトーナ研究所にやって来た男の名はGヒーローゴキブリマン。
ヒーローである。名前からして間違いなくゴキブリの姿でありどっちかと言えば怪人だろと思ったかもしれないが彼の心は立派なヒーローである。
「おお来たかゴキブリ。」ゴキブリマンに対してゴキブリ発言した人こそテキトーナ博士・・・凄い発明を作るのだがなんかが足りないのである。
「ゴキブリって・・・ゴキブリマンってちゃんと呼んでくださいよ。」
「いや、二文字増やすとダリーじゃん。」
「二文字増やすとダリーって面倒くさがりすぎですよ・・・。」
「しゃーねーな、ゴキブリマン実はお前に実験台になって欲しい物があってな。」
「それは一体何ですか？」ゴキブリマンはテキトーナ博士に何の実験になるかを聞く。
「それはこの次元越えもできる。テキトーナ携帯型転送装置のじゃ！」
「次元越えもできるんですか！？凄いじゃないですか！」
「早速使ってみ。」
テキトーナ博士はゴキブリマンに転送装置を投げ渡す。
「ちょっ、受け取りそこねて床に落として壊したらどうするんですか！？」
「ぐちぐち言わないではよ転送装置使え。」

「全く・・・このスイッチを押せばいいんですね。」
ポチ。
ゴキブリマンはスイッチを押したそしてゴキブリマンはある事に気づいた。
「あの・・・博士？場所指定とかでないんですけど・・・。」
「だってその機能つけてねーもん。」
博士の衝撃発言にゴキブリマンは驚きの表情を見せる。
「転送装置に一番必要なものが何でついてないんですか！？」
「作る途中で飽きて適当に仕上げたからな、自動修復機能と自己エネルギーチャージシステムはついてるから安心しろよ。」
「妙に凄いのつけてんのに何で最初につけるべきであり一番大切な場所指定機能がないんだぁ！！？」
ゴキブリマンは博士の適当さに驚くばかりであった。
「まあ、頑張れや石の中にいるとかならないといいな。」
「博士ぇぇぇぇ！！」
カッ！
フラッシュの後ゴキブリマンはその場にいなかった。
「さてと・・・寝よ。」

☆☆☆☆

「あ・・・。」
私は今ここで死んじゃうんだ・・・魔女と戦っている巴マミはそう思った・・・魔女が彼女の頭に噛みつこうとするその時。
カッ！
ゴキブリマンが魔女の口の中に転移してきた。
「へっ！？」
ガブッ！
巴マミは噛みつかれなかったがゴキブリマンが噛みつかれてしまっ

た。
「私、助かったの・・・？でもあれは？」
マミは魔女に噛みつかれているゴキブリマンを見る彼は抵抗していた。
「何だか知らんが私を食うなぁーー！！」
バキィッ！
ゴキブリマンは魔女をその拳でぶっ飛ばす。
「今のは正当防衛だ悪く思わないでくれ。」
「ごっ、ゴキブリ！？」
マミはゴキブリマンを見て驚く・・・まぁでかいゴキブリだし・・・。
「おや？君達は？」
ゴキブリマンはマミ達の方を見た、ちなみにマミと一緒にいるのは、まどかとさやかと言う子である。
「おっきいゴキブリが喋った！？」
「怪人だ！？」
まどかとさやかはそれぞれゴキブリマンを見て発言する。まどかとさやかの言葉にゴキブリマンは少し傷つく。
「うん・・・女の子には言われ慣れてるけどさ・・・やっぱり傷つくなぁ・・・。」
ゴキブリマンが落ち込んでいるとゴキブリマンにぶっ飛ばされた魔女が起き上がり再びマミに襲いかかろうとする。
「ひっ！」
マミは魔女が襲いかかってきた事に恐怖するが・・・。
「少女を襲おうとするとは許せん！このGヒーローゴキブリマンがお前を倒す！」
ゴキブリマンは魔女に己の正義の拳を叩き込む。魔女は凄い勢いでふき飛び倒される。
「倒したか、君大丈夫かい？」
ゴキブリマンは襲われそうになったマミを心配し声をかけるが。

「マミさんによらないで！デカゴキブリ！」
「怪人め！マミさんを助けたふりをして襲おうとする何て許さないよ！」
まどかとさやかはゴキブリマンが悪者だと思い攻撃を仕掛ける。
「ちょっ、私は怪人ではないって・・・こうなったら仕方ないさらば！」
ゴキブリマンは羽を広げ羽ばたいて何処かへと逃げた。
「怪人は逃げたみたいだね。」
「大丈夫だったマミさん？」
「あの人、私を助けてくれた・・・Gヒーローゴキブリマン・・・か。」
「あんな変な生き物見た事がないよ一体何なんだろうね。」
白い生物キュゥべえはゴキブリマンを見てそんな事を言っていたがお前にそんな事は言われたくはないと思う。
「巴マミ・・・生きていたのね・・・それとさっき羽ばたいていったのは何？」
羽ばたいていったのを聞いたこの子は、ほむら一言で言えばまどかを助けようとしてる子である。
「・・・羽ばたいていった彼の名はゴキブリマン・・・私を助けてくれた人。」
「（ゴキブリマン・・・そんな奴は今までの世界にいなかったわ？）」
ほむらはゴキブリマンの存在を気にかけた・・・そのゴキブリマンはというと。
「この世界はどうやら私みたいな見た目の者は馴染みのない世界の様だなー・・・それしても石の中にとかならなくてよかった・・・寝床どうしよう。」
ゴキブリマンは今日の自分の寝床を考えながら羽ばたいていた。
ゴキブリマンがこの世界にもたらす変化はどんなものなのか・・・この物語は続く・・・のか？

Gヒーローゴキブリマン　プロローグ　完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5695y/

その者の拳は滅殺の拳

2011年12月12日23時54分発行